

ミューズNo. 22

平和のための博物館・市民ネットワーク通信

発行：2008年12月

編集：山辺昌彦、山根和代、安斎育郎

翻訳：谷川佳子、森岡純子、加藤ニコル、山根和代 イラスト：戸崎恵理子

事務局所在：東京大空襲・戦災資料センター内 山辺昌彦気付

住所：東京都江東区北砂1-5-4

Tel: 03-5857-5631 Fax: 03-5683-3326

全国の平和博物館、平和資料館などの活動について、お知らせします。

第6回国際平和博物館会議、成功裏に開催される

組織委員長 安斎育郎

2008年10月6日～10日、立命館大学、京都造形芸術大学、広島平和記念資料館を舞台に、第6回国際平和博物館会議が予定通り開催され、大きな成果を挙げました。会議が始まるまでに、すでに、予稿集だけでなく、“Museums for Peace Worldwide”（山根和代編著）、“Museums for Peace: Past, Present and Future”（安斎育郎、ジョイス・アップセル、サイード・シカンダー・メーディ編著）も刊行され、海外参加者に大いに喜ばれました。前者は、現在、日本語版を発行する準備が山根さんの手で進められています。

今次国際会議には、5大陸、24か国からの約70人の海外参加者に加えて、国内の平和博物館の関係者

や学生・一般市民など、5日間でのべ5000人近い人びとが参加、その規模において会議史上最大だっただけでなく、7本の記念講演（ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン平和のための博物館国際ネットワーク統括コーディネータ、ケイト・デュース国連事務総長軍縮問題顧問、野中廣務元内閣官房長官、安斎育郎組織委員長、雨宮清山梨日立建機社長、千住博京都造形芸術大学学長、秋葉忠利広島市長）、19の分科会、5つのシンポジウムやパネル討論会、1つの被爆者証言のほか、ポスト・コンフェレンス・ツアー（東京・松江）での2つのパネル討論会に加えて、造形芸大での文化行事（狂言・和太鼓・茶席・神楽）や、立命館・造形芸大・広島それぞれにおけるレセプションなど、会議は多彩に展開され、海外参加者の多くが「素晴らしい国際会議だった」と評価してくれました。



Erico

今回の会議がテーマとして掲げた「ピース・リテラシー」についても多面的な問題提起と意見交換がありました。もとより1回の会議で汲み尽くされるほど単純な概念ではなく、今回の議論をまとめ、これを足がかりに豊潤化する方向性が目指されなければなりません。「ピース・リテラシー」は、「平和についての状況を読み解き、そこに問題があれば、その解決のために主体的に関わり行動する基本的な能力」とでも言うべきものです。その背景には、「問題を解決するのは私たち自身だ」という認識が必要で、ケイト・デューズさんには「市民が世界を動かすことが出来た事例」として「世界法廷運動」などについて具体的に語っていただきました。また、ベティ・リアドン先生のセッションでは、平和教育の中での平和博物館の位置を理解するための討議がなされましたし、単に戦争や紛争の歴史的事実に関する展示だけでなく、平和創造において芸術や技芸が果たす文化的な役割についても豊かな実践報告がなされ、「平和博物館＝展示」という原初的な枠組みをこえて、人びとの心に訴えかけるさまざまな手法を活用することの重要性が定着し

てきた感を受けました。

今回の国際会議で負けず劣らず大切だったのが「平和のための博物館国際ネットワーク」(INMP)の総会の成功です。これまで規約もなかったネットワークでしたが、今回の総会で約款、ロゴ、役員、次期活動計画が採択され、かなりしっかりとした足場を築きました。日本からは安斎育郎氏(立命館大学国際平和ミュージアム・名誉館長)が執行委員に、また、君島東彦氏(同ミュージアム平和教育研究セクター長)と山根和代氏(平和資料館「草の家」国際交流担当)が諮問委員に選出されました。なお、INMPの公式ロゴとして、この第6回国際平和博物館会議のロゴがそのまま採択されることになりましたが、これは共催した東北芸術工科大学の齋藤優祐さんの作品です。今後、齋藤さんの作品が平和のメッセージを乗せて世界を駆け巡ることになるでしょう。素敵なお知らせです。

さらに、同時並行的に多数の展示企画がおこなわれましたが、これも過去のこの会議ではなかったことです。世界の平和博物館展、教科書国際比較、「長崎市長 故伊藤一長の仕事」展、「平和友の会」の片岡行雄さんの人形展示、キム・ミョンヒの「ピース・マスク」展その他、大小いくつもの展示が取り組みました。

さて、このようにそれなりの成功を収め得たのは、言うまでもなく関係者の努力の賜物であり、70人ものボランティア学生の参画や「平和友の会」の協力も、みんなあつてのことです。問題は、この国際会議で

開きかかった蕾をどう色彩豊かに花開かせるかということです。国際ネットワークも、定款を決め、役員を決め、活動計画を決めたとはいうものの、事務所も持たず、財源も持たない現状からどう発展軌道に乗せていくのか、これはなかなかの覚悟と知恵と実践力を必要とする難問です。宜しくご支援下さい。

平和のための博物館国際ネットワークの役員は、次の方です。

統括コーディネーター

Peter van den Dungen : ブラッドフォード大学 (イギリス)

執行委員会

1. Zulfiqar Ali, Director, 平和・人権子ども博物館 (パキスタン)
2. 安斎育郎 : 立命館大学国際平和ミュージアム (日本)
3. Joyce Apsel, ニューヨーク大学、国際人権団体 (アメリカ)
4. Steve Fryburg, デイトン国際平和博物館 (アメリカ)
5. Sajid Ishaq, 反貧困異教徒間連盟 (パキスタン)
6. 金英丸 : 平和博物館センター (韓国)
7. Balkrishna Kurvey, ノーモアヒロシマ・ノーモアナガサキ平和博物館 (インド)
8. Gerard Lossbroek : 国際パックスクリスティ (ベルギー)
9. Roger Mayou, 国際赤十字・赤新月博物館 (スイス)
10. Iratxe Momoitio : ゲルニカ平和博物館 (スペイン)

11. Carol Rank : コヴェントリー大学平和和解研究センター (イギリス)

12. Lucetta Sanguinetti : コルレーニョ町会議員—平和博物館 (イタリア)

諮問委員

1. Clive Barrett : 平和博物館 (英国)
2. Janet Gerson : ティーチャーズカレッジコロンビア大学平和教育センター所長
3. Anatoly Ionesov : 国際平和連帯博物館 (ウズベキスタン)
4. 君島東彦 : 立命館大学国際平和ミュージアム (日本)
5. Syed Sikander Mehdi : 平和研究者 (パキスタン)
6. Erik Somers : オランダ戦争資料研究所 (オランダ)
7. Maria Villarreal : 平和研究者 (グアテマラ)
8. 山根和代 : 平和資料館「草の家」 & 高知大学 (日本)
9. Kate Dewes : 国連事務総長軍縮諮問委員 (ニュージーランド)
10. Shahriar Khateri : テヘラン平和博物館 (イラン)
11. Anne C. Kjelling : ノルウェーノーベル研究所 (ノルウェー)
12. Sultan Somjee : ケニア地域社会平和博物館創設者 (ケニア、カナダ在住)

平和のための博物館国際ネットワーク (INMP) のロゴ

平和のための博物館国際ネットワ

ークのロゴとして、東北芸術工科大学の齋藤優祐さんの作品が総会で決定しました。ピンクと青の羽のようなものが重なり合ってハートの形をしています。それを通して平和は個人で達成されるものではなく、さまざまな価値観を持った個人の協力によって実現できること、そして平和は壊れやすいので愛情を持って注意深く育てていかなければならないことを表現しようと思いました。青は地球を、ピンクは愛と友情のシンボルです。彼はピンクと青を徐々に変化させて、平和の波が徐々にそして確実に広がることを表現しようと思いました。



INMP

「平和のための博物館国際ネットワーク」の代表として国連とNGOの会議に参加して

平和のための博物館国際ネットワーク
諮問委員：山根和代（平和資料館「草の家」）

「平和のための博物館国際ネットワーク」は、国連の広報局と協力するNGO（非政府組織）のひとつです。これまでずっとニューヨークの国連本部で開催され、ニューヨーク大学のジョイス・アプセル氏が参加されてきました。しかし第61回国連・NGO会議は9月3-5日に初めてパリのユネスコ本部で開催され、「平和のための博物館国際ネットワーク」の代表として私が参加致しました。

今回の会議のテーマは、世界人権宣言60周年を記念し「すべての人びとの人権の再確認をー世界人権宣言60周年」で、1948年に人権宣言が採択されたフランスで会議が開催されました。

人権をテーマにした博物館として、日本ではリバティ大阪、高知市立自由民権記念館、福山市人権平和資料館、堺市立平和と人権資料館があり、海外では「平和、自由、人権世界センター」（フランス）や平和と人権子ども博物館（パキスタン）があります。

壇上には世界人権宣言の起草者のパネル写真や、またロビーには世界人権宣言に関するポスターが展示されていました。例えば、アメリカの美術専攻の学生が作成したポスターで、子どもの兵士のポスターの横には、世界人権宣言第4条の内容、学生の感想が書かれた説明がありました。また会議の参加者が自由に人権について自分の考えを書き込むことができる大きな紙があり、いろいろ工夫がされていました。

本会議では、今こそ世界人権宣言

が重要であること、人権擁護のためにNGOが果たす役割は大きいこと、国連とNGOが協力をしていく必要性が強調されました。人権教育に関する会議では、国の状況に応じた取り組みが紹介されました。識字率の低いインドでは物語や絵画が使われ、アフリカ（カメルーン）では演劇が使われていること、また16歳から25歳までの若者への人権教育では、芸術やビデオが効果的であるという報告がありました。

私はNGOと大学の協力に関する分科会で、平和のための博物館が、平和教育や人権教育を推進する上で大きな役割を果たしていること、第6回平和のための博物館国際会議が、京都と広島で開催されること、平和や人権のための博物館やセンターがあれば、知らせてほしいことなど発言しました。その後数人から声をかけられ、今後交流をしていくことになりました。司会者のまとめの中で、「世界や私たちの身の回りには問題が山積していますが、それを、現状を変える良い機会と捉えて問題に取り組んでいきましょう」とあり、大変印象的でした。

会議には、2000のNGOから約1300人の参加者がいました。

以下は、今後情報を入手するのに役に立ちそうな情報です。

● *Museum International* がユネスコから出版されています。

(www.unesco.org/publishing)

● 国連の情報センターが世界各地にあるので、そことも協力することが強調されました。

日本の連絡先は、次の通りです。

国際連合広報センター【United Nations Information Centre】

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-70 UNハウス8F

Tel : 03-5467-4451 / FAX : 03-5467-4455

<http://www.unic.or.jp/>

Email: unic@untokyo.jp

Director: Ms. Charmine Koda

● 国連とNGOに関連したウェブサイトは次の通りです。

www.un.org/dpi/ngosection

● ユネスコとNGOが協力する体制があります。

詳細は、次の通りです。

E-mail:

comite.liaison.ong@unesco.org

Website: <http://ong-comite-liaison.unesco.org>

次の大会は、メキシコで開催されるようになるだろうと言われていました。ただ役員にアジアと東ヨーロッパ出身者がいないので、今後の課題となりました。

今回の会議に参加して、世界人権宣言を再読して、それを今後生かしていくこと、そして世界人権宣言の内容を展示し、様々な取り組みをしていく重要性を学びました。また同じように平和のために活動している多くのNGOが世界にいることを知り、大いに励まされました。

平和のための博物館・市民ネット

ワーク第8回全国交流会 報告

山辺昌彦

第6回国際平和博物館会議の日程の中で、2008年10月8日午後3時30分～6時に立命館大学国際平和ミュージアム2階の会議室で、第8回全国交流会が開かれました。司会は都立第五福竜丸展示館の安田和也さんが務めました。

今回の交流会には、ひめゆり平和祈念資料館、岡まさはる記念長崎平和資料館、ナカサキピースミュージアム、草の家、ピースおおさか、立命館大学国際平和ミュージアム、ピースあいち、安曇野ちひろ美術館、山梨平和ミュージアム、都立第五福竜丸展示館、わだつみのこえ記念館、東京大空襲・戦災資料センター、丸木美術館、アウシュヴィツ平和博物館、太平洋戦史館など館の方がたが参加されました。歴史研究者、平和問題・社会教育・戦争遺跡などの研究者や、平和友の会、中国新聞社、岩波書店、乃村工芸社の方がたも参加しました。海外からは、韓国のナムの家／日本軍「慰安婦」歴史館の方やアメリカの西ミシガン大学の歴史研究者も参加しました。このように、国際平和博物館会議の中で開いたため、はじめての方も多く、従来にない広範な参加となりました。交流会の参加者は合計42人でした。しかし、時間が少なく、自己紹介で終わり、例年のように各館の活動を紹介する話は出来ませんでした。

交流会の最後に、事務局から別項のような会計報告などがなされ、了承されました。また、事務局・編集委員・運営委員も引き続き同じ構成で来年度も続けることになりました。2009年の第9回全国交流会は、12

月5、6日に東京で開催することになりました。

交流会終了後、懇親会を「鉄平」で開きました。韓国の平和博物館の方や立命館大学国際平和ミュージアム関係者、3人が懇親会から参加しました。ここで活発な議論がなされ、体験者から若い人への戦争体験を伝える取組の継承、法人と税制などの運営上問題なども、来年の交流会で議論したいという意見も出ました。

平和のための博物館・市民ネットワーク会計報告

(2007年12月～2008年9月)

●会計報告

収入		
会費		158000円
繰越		100880円
計		258880円
支出		
印刷・封筒など		47849円
送料		107910円
繰越		103121円
計		258880円

●内訳

会費			
03年度	1人		2000円
04年度	1人		2000円
05年度	1人		2000円
06年度	3人		6000円
07年度	22人		44000円
08年度	42人		84000円
09年度	3人		6000円
10年度	2人		4000円
11年度	1人		2000円

12年度	1人	2000円
13年度	1人	2000円
14年度	1人	2000円
計	79人	158000円

印刷費

日文20号	10780円
英文18号	10134円
日文21号	6160円
英文19号	8190円
封筒代	6945円
紙代	3040円
ラベル	2600円
計	47849円

送料

日文20号	16240円
英文18号	43600円
日文21号	5730円
英文19号	42340円
計	107910円

繰越

郵便振替	98030円
現金	5091円
計	103121円

個人会員	84人
2014年まで納付	1人
2010年まで納付	3人
2009年まで納付	1人
2008年まで納付	42人
2007年まで納付	22人
2006年まで納付	9人
2005年まで納付	6人
入会	4人
退会	10人

●事業報告

ニュースの発行

日文20号	2008年	2月
英文18号	2008年	2月
日文21号	2008年	7月
英文19号	2008年	9月

第8回全国交流会の開催 2008年10月8日

事務局

東京大空襲・戦災資料センター内
山辺昌彦気付

編集委員

山根和代・山辺昌彦・安斎育郎

運営委員

安田和也・梶慶一郎・池田恵理子・浅川保・宮原大輔・山辺昌彦

●事業予定

ニュースの編集・発行

日文2回・英文2回

第9回全国交流会

2009年12月5、6日に東京で開催予定

東京大空襲・戦災資料センター主催

「無差別爆撃国際シンポジウム」
の報告

山辺昌彦

東京大空襲・戦災資料センター戦争災害研究室主催による「無差別爆撃国際シンポジウムー世界の被災都市は空襲をどう伝えてきたのかーゲルニカ・重慶・東京の博物館における展示／記憶継承活動の現在」が2008年10月11日に江戸東京博物館1階ホールにおいて開催されまし

た。第6回国際平和博物館会議に連動した企画で、山根和代さん、谷川佳子さん、加藤ニコルさん、池谷りささん、安斎育郎さんには特にお世話になりました。ありがとうございました。

これは、空襲で大きな被害を受けた世界の被災都市は空襲被害の実態をどのように検証し、伝えてきたのかを明らかにするもので、具体的には、20世紀の戦争で大きな被害を出した、スペインのゲルニカ、中国の重慶、東京という3都市の博物館で、空襲の展示・研究に携わってきた専門家がはじめて一同に集い、無差別爆撃に関して、博物館における研究や展示という記憶継承活動の歩み・現状・課題について出し合い、議論をしたものです。参加は195名で、実証的で充実した報告があり、活発な質疑がおこなわれました。以下その概要を紹介します。

まず、作家で東京大空襲・戦災資料センター館長の早乙女勝元さんが開会の挨拶をしました。その中で、早乙女さんが重慶やゲルニカを調査した経験も紹介し、第2次世界大戦における無差別爆撃の民間人の被害も追体験の時代になりつつあり、新たな市民の運動が始まっていることを話しました。

次いで、司会を務めた一橋大学大学院教授で戦争災害研究室長の吉田裕さんから次のような問題提起がありました。1、第2次世界大戦の直接の記憶を持つ人びとが少数派になる中で、空襲の体験を記録化し、記憶として継承することが問われおり、この問題を博物館における展示の問

題を中心に考えてみたい。2、民間人への無差別爆撃が今日も世界の各地で続けられおり、第2次世界大戦の空爆の犠牲者に対する戦後補償の問題は未解決のまま、切実で現実的な課題です。3、この問題を1国史の枠組みでとらえられないので、国際シンポとして企画しました。

報告は以下の3本です。

第1報告はゲルニカ平和博物館館長イラッチェ・モモイショさんの「ゲルニカ 恐怖の体験」でした。パワーポイントを使った報告と、あわせてゲルニカ空襲を紹介するDVD「ゲルニカ・ストーリー」も上映しました。報告ではまずスペイン内戦の概要を話し、次いでゲルニカ爆撃の実態を話しました。爆撃はイタリアの空軍に護衛されたドイツ空軍のコンドル軍団によって実施されました。爆撃は、3つの段階で実行されました。第1段階は建物を破壊するために250~300キロの高破壊力爆弾が使用されました。第2段階は1キロの焼夷弾が投下されました。第3段階では住民に対する機銃掃射がなされました。犠牲者の正確な数はわからないが、一般的には250人が死亡し、数百人が負傷したとされています。

フランコ軍は責任を認めていません。逆に証拠はねじ曲げられ、フランコ側の報道陣は、バスク共和国軍が、ビルバオから撤退する途中で町に火を放ったと主張しました。ピカソの有名な絵画「ゲルニカ」は、ゲルニカという町の名前を世界に広めることになり、反戦の叫びの象徴となっています。1998年にオープン

したゲルニカ博物館（2003年にゲルニカ平和博物館に改名）は、町の記憶を広め、知らせる博物館であり、過去を記憶し、未来のための博物館でもあります。

第2報告は、重慶市・三峡博物館副研究員の李金栄さんの「重慶大爆撃を証明する一口述史料から見る中国侵略日本軍の都市爆撃・住民虐殺の戦争犯罪」でした。報告の前にまず、重慶爆撃を再現したジオラマを中心に、重慶中国三峡博物館の展示を収録したDVDの上映し、紹介しました。報告の概要は次のようなものでした。

1938年2月から1943年8月まで、日本軍は戦時中国の首都である重慶に対して、5年半にわたり重慶大爆撃をおこないました。日本軍は、飛行機9513機を出動させて218回の爆撃をおこない、爆弾21593発を投下して、民家17608棟を破壊し、重慶市民25989人（重慶大隧道惨案と長江沿岸都市の死者は含まれていない）を爆死傷させました。その中の大事件には、5・3、5・4大爆撃、8・19大爆撃と較場口大隧道惨案があります。1980年代から、重慶市博物館は重慶大爆撃の資料を収集し、研究もして、『重慶大爆撃文物資料展』を開催し、『重慶大爆撃写真集』を出版しました。2000年からは重慶大爆撃体験者の聞取をし、体験者の口述資料160人分と写真資料250枚を収集・整理しました。

報告では重慶大爆撃事件の15名の体験者の口述史料を紹介しましたが、そこから言えることは次の3点です。1、重慶大爆撃の本質は、空

から爆弾を投下し、住民を虐殺する行為であり、東京、広島が爆撃されるより早く、日本軍が大後方の市民を爆撃したものです。2、重慶大爆撃を画策した戦犯は制裁を受けていないし、遭難した住民も賠償を受けていません。重慶大爆撃の戦争責任を追及しなければ、心の痛手が癒されません。3、重慶大爆撃は決して単に過去の歴史事件ではなく、第2次世界大戦後、この戦争の様式は全世界範囲に拡大しました。重慶大爆撃の犯行を清算しなければ、空中から都市を爆撃することをなくすことは出来ないし、この歴史が再び演じられることになるであろう。

第3報告は東京大空襲・戦災資料センター主任研究員の山辺昌彦の「日本の「平和のための博物館」における空襲研究と展示の歴史と現状」でした。まず第1に前史として、空襲を記録する会による記録運動と展示を、第2に、1980年代からの大阪での先進的な資料収集、研究、展示の取り組みを、第3に、日本全体における博物館での空襲展示を、第4に東京大空襲・戦災資料センターの設立経過と展示内容を、第5に、東京の歴史博物館での、特徴的な東京空襲に関する展示を紹介しました。第6に、日本の博物館における重慶空襲の展示について、無差別爆撃の歴史の中で、重慶爆撃を位置づけたたり、日本の侵略戦争における加害の1つとして位置づけて、重慶市民の被害をも紹介していること、日本軍の加害が日本の市民の被害をもたらしたことを示していることも紹介しました。

第7に現在の研究の到達点を以下のように紹介しました。①無差別爆撃と国際法については、植民地独立運動鎮圧戦争で飛行機が使われ、毒ガスも使われていること、空爆を規制する「ハーグ空戦規則」がつくられ、実定法ではないが、1930年代後半には国際慣習法化した、②B29による日本本土空襲には、軍需工場爆撃、大都市焼夷弾空襲、機雷投下、九州の基地・飛行場爆撃、石油基地への爆撃、中小都市焼夷弾空襲、模擬爆弾・原子爆弾投下がある、③東京大空襲の決定と位置づけでは、アメリカ軍は1944年4、5月には、B29の機数が十分揃って、季節風が強い、1945年3月から東京など大都市の市街地への大量焼夷弾攻撃を始めることを決定していたこと、東京大空襲は、空軍独立のために、成果を上げることも狙ったものであり、司令官個人の決定ではない、④東京大空襲の実相では、3月10日の大空襲の目標地域は焼夷弾に最も弱い地域で、ここには明確な軍事目標はなく、市民の居住地であったこと、多くの市民が逃げ場を失い、避難所も火災に襲われ、約10万人が犠牲となったが、これは、空襲警報が遅れ奇襲となったこと、木造家屋の密集地に大量焼夷弾が投下され強風により大火災となったこと、川が縦横にあって安全な所に逃げられなかったこと、逃げないで消火しろとの指導により逃げおくれたことなどがその理由と考えられている、⑤被害者への補償では、戦時中は戦時災害保護法によって民間人にも給付金を支給していたが、戦後は生活保護法の

制定により戦争被害者への特別の給付がなくなり、連合国の占領が終わると軍人・軍属のみを対象とする特別給付が作られ、対象外とされた民間人は、国家補償を求める運動をした。最後に補足的に、連合国による中国への爆撃がもたらした中国の民間人への被害を考える必要があること、和解にはその前提として、事実を明らかにし、謝罪、補償をしなければならないことも話しました。

論文参加は、コベントリー大学・平和・和解研究センターのアンドリュー・リグビーさんの「戦争を後世に伝える—ヨーロッパの2つの街コベントリーとドレスデンの体験談」と重慶中国三峡博物館の馮慶豪さんの「重慶無差別爆撃が外国大使館・領事館及びその他の中国駐在機構に与えた傷害状況についての初歩的研究」でした。

報告に続けて沖縄大学客員教授の前田哲男さんから以下のようなコメントがありました。まず、民族としてではなく、共有されるものとして継承が必要で、ドイツにも極右の見地からの空襲継承が出てきているが、そうではなく、侵略戦争の中での体験として共通のものとしていく必要があることを話されました。ついで、最近の空襲研究を紹介し、最後に、中国の重慶爆撃の報告の背景説明として、重慶が首都として政治中枢であったので、日本はそこを落とすことができなかったが、地上から軍隊が行けないので、空からの爆弾で抗戦意欲をなくそうとする戦略爆撃をしたことを話しました。さいごに重慶爆撃を現在、未来につなげて考える必要があ

ることも言われました。

討論は以下のような内容でした。まず、ワルシャワ空襲を取り上げる必要があるとの意見が出ました。ゲルニカへの質問には、ゲルニカ空襲の犠牲者は、名前などの証拠が残る犠牲者は180名であり、そこから現在は250～300人が犠牲になったと考えていること、なぜゲルニカが目標になったのかについては、ゲルニカが工業都市や鉱山や交通の要地に近かったこと、バスク民族の象徴的な土地で、バスク民族を滅ぼすためであることを回答しました。

重慶への質問には、重慶が焼き払われなくて、屈服しなかった理由は、霧の町、山の町であったこと、40万人が避難できる頑丈な防空壕を掘ったこと、警報システムが有効に機能していたことがあること、重慶には軍事施設はなく、軍需工場は郊外の山にあったが、ここは爆撃されなかったことを回答しました。

共通質問の、アメリカ軍の日本空襲についての博物館での展示に対しては、ゲルニカでは広島・長崎原爆の特別展を昨年したが、その他の空襲は展示していないこと、重慶をはじめ中国では展示はないが、研究する必要は言われはじめているとの回答がありました。博物館の開館は最近だか、それ以前動きについての質問には、ゲルニカは、独裁政権があって、空襲は無かったとされていたので、犠牲者が発言できなく、1980年代から民主主義になって口述史料の収集もできるようになった、重慶は1985年までほとんど調査も無く、最初は実物の資料を収集し、1993

年から展示を始め、1996年から生存者の証言を取るようになった、との回答がありました。

日本政府は重慶爆撃を謝罪しているかの質問については、村山談話を謝罪と考えるなら、謝罪しているが、日本政府は無差別爆撃や市街地爆撃を認めていないので、重慶には謝罪も補償もしていないとの回答が前田さんからありました。

まとめの質問、爆撃の責任者は明らかになっているのかについて、ゲルニカは、フランコが暗黙の了解をしたことは明らかで、ドイツ政府は責任を認め、補償にも発展しているが、イタリアはまだこれからであると回答しました。重慶については前田さんが、爆撃は天皇の名の命令によるものであり、現場の決定者や実施部隊の司令官も明らかになっているが、重慶爆撃は東京裁判で訴追されなかったと回答しました。日本は、従来はルメイの責任が言われていたが、ルメイの独創性もあるが、都市爆撃は統合参謀本部の決定であり、アメリカ軍全体の責任になる、と回答しました。

和解に向けて、ドイツの戦災都市ポルツハイムと姉妹関係の都市関係を結んでいることについての質問に、ゲルニカから、姉妹都市とは若者が交流し、被害を語り合うことが積み重ねられているとの回答がありました。最後に各報告者から、ゲルニカ、重慶、日本いずれも、若者の関心が低く、空襲の事実が知られていないので、努力していることが話されました。司会から課題として、記憶の継承と共通の難しさがあること、記

憶がせめぎ合いの中にあることが話されました。

国内ネットワークのニュース

山梨平和ミュージアム：山梨・甲府市

理事長 浅川 保

前号で、6月26日の山梨平和ミュージアム－石橋湛山記念館－（YPM）の開館1周年記念行事を中心に報告しましたので、今回はその後の活動や展示の概要を中心にします。

7月6日には甲府空襲・甲府連隊跡フィールドワークとして、甲府市北部地域をまわるコースを実施。空襲で最初に焼夷弾が落とされた塚原町の恵運院で青山住職からお話を聞いた後、甲府連隊の唯一の遺構で、修復保存された山梨大学赤レンガ館を見学、最後に朝日町自治会館で雪江憲三さんから甲府連隊と関わった朝日町商店街の歴史についての話しを聞きました。

8月7～10日、YPMが中心となって実行委員会を組織、「2008平和を願う山梨戦争展」をミュージアム近くのびゅあ総合で開催しました。「沖縄戦の真実と教科書」「従軍慰安婦問題」「靖国問題」の他に各団体の自主展示もあり、戦時下の学校生活や被爆者の証言の他、青年の広場での若者の交流等も括発におこなわれました。

9月21日、「平和への歩み－各分野からのアプローチ」第3弾として、朗読などを通して戦争を語りつぐ活動をしている「ディアマイフレンド」のメンバー（植松光宏・濃野初美・加藤礼子・古屋吉雄）による「敵性語」「墨塗り教科書」「薄明」などの朗読、それに、演劇の実演、墨塗り教科書の紹介など多彩な活動が披露されました。

9月30日に会報「平和の港」第5号を発行しました。内容は、開館から1年余が経過して、YPMこの間の取り組みから、各紙の紹介記事から、YPMを見学して、活動記録、当面の企画案内です。

10月26日、石橋湛山没後35年を記念して、小生を講師に、フィールドワーク「湛山ゆかりの地を訪ねて」を中型バスで実施。参加者はまず、湛山の中学時代の文章や胸像の残る甲府一高に集合、湛山の文章の載る校友会雑誌や湛山揮毫の額などを見学、ついで湛山が幼少期を過ごした南アルプス市の長遠寺、増穂町の昌福寺を訪ね、湛山の学生時代の手紙や記念碑などを見学しました。

11月16日、「平和への歩み－各分野からのアプローチ」第4弾として、「戦死者の遺族の思い」をテーマに4人の方からの証言・朗読を聞きました。戦死した兄の遺作をまとめた小林岳さんと姪の渦巻恵さんの証言と朗読、戦死した息子の遺稿集をまとめた姑について語った古屋茂子さん、児童文学やエッセイで戦争を扱った井之上妙美さんの朗読は参加者の心を揺さぶりました。

YPMの今後の予定としては、12

月 7 日に平和教育シンポジウム、2009 年 1 月 15 日～18 日には、中村悟郎写真展と講演会「33 年目の枯れ葉剤」を開く予定です。

次に展示の概要です。YPMでは、昨年 5 月の開館記念展示として「甲府空襲の実相」、昨年 11 月には企画展「甲府連隊の軌跡」、今年 6 月には企画展「戦時下の暮らし」を実施、現在はこれらの展示を総合した展示を 1 階でおこなっています。

「甲府空襲の実相」では、空襲で亡くなった 1127 名全員の氏名等を記載したパネル、元日航機長諸星廣夫氏と B29 飛行士との交流で明らかになった甲府空襲の全貌と、戦略爆撃の系譜として、ドイツのゲルニカ爆撃、日本軍の重慶爆撃に始まり、東京大空襲・ヒロシマ・ナガサキに至る歴史をパネルや実物資料で展示しています。

「甲府連隊の軌跡」では、1909 年の開設から 1945 年の敗戦に至るまでの甲府連隊の歴史を通して、15 年戦争の実相に迫ったもので、19 連隊の満州移駐、149 連隊の無言の凱旋、日中戦争の実態、49 連隊のレイテ戦の悲劇などをパネル・実物資料で展示しています。

「戦時下の暮らし」では、戦争の真実が知らされなかった、奪われた思想の自由、学校教育と子どもたちの暮らし、学童疎開、朝鮮人労働者の動員などをパネルで展示し、戦時下の教科書の実物も展示しています。

2 階には「偉大な言論人石橋湛山」として、生まれは東京だが、山梨県の甲府市・増穂町・南アルプス市などで育ち、甲府中学・早稲田大

学を出て、『東洋経済新報』の記者として、大日本主義に抗して平和・民権・自由主義の論陣を張り、戦後、首相となった湛山の生涯と思想が、写真・パネル・実物資料で展示されています。全国で初の石橋湛山記念館として、県外からの見学者・問い合わせも多く注目されています。

なお、10 月に京都で開かれた第 6 回国際平和博物館会議には、YPM から春日館長・小生ら 5 名が参加しました。

住所 甲府市朝気 1 - 1 - 30

TEL / FAX 055-235-5659

<http://ypm-japan.jp/test/index.html>

アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」

(WAM) ～広がる連帯活動

WAM運営委員長 池田恵理子

2007 年に引き続き海外での「慰安婦」問題への盛り上がりが大きく、連帯活動に忙しい日が続いています。日本に公式謝罪と賠償を求める国会決議は昨年米国・オランダ・カナダ・EUに続き、今年韓国・台湾でも採択され、10 月には国連の自由権規約委員会も日本政府への勧告をおこないました。国内では宝塚・清瀬・札幌の市議会が政府への意見書を採択。WAMでは国内のNGOと協力して、事務局長を国連でのロビイングに派遣し、成果をあげました。11 月の第 9 回アジア連帯会議（東京）にはアジアの被害各国だけでなく米国・カナダの市民団体も参

加して、「何とか日本政府を動かそう」と作戦を練りました。一方、国際世論の高まりは右翼勢力を刺激し、WAMへの攻撃も強まっています。1月には20数名の男たちが罵声とともに押しかけ警察を呼ぶ騒ぎになりましたが、皆が力をあわせてはねのけました。今後も警戒を怠らないよう心がけます。

ただいま開催中の中国展はカタログも出来上がって好評ですが、秋に始まる予定だった山西省武郷での中国語版パネル展は準備が間に合わず、延期になりました。東ティモールでは、テトゥン語版パネルが2月から現地での巡回展を始めて大活躍。国内でのパネル貸し出しも増えて、夏休み期間には全国6か所で巡回展が開かれました。近年、民衆の手による平和のための資料館・記念館建設が大きくなっているようになってきました。WAMは「小さくても存在を主張するミュージアム」として参考になるらしく、各地へ呼ばれたり視察も受けています。韓国では「ナムムの家歴史館」が10周年を迎え、挺身隊問題対策協議会の「女性と戦争人権博物館」は来年3月に着工予定です。台湾でも準備が進行中。WAMではこれらのミュージアムの‘応援団’として展示内容や募金活動の支援をおこなっています。

11月には「WAM資料検索データベース」がスタートしました。WAMが所蔵する書籍・ミニコミ誌・資料・ビデオなどに、来館者が横断的にアクセスできるようになりました。全アジア地域の慰安所マップの作成も佳境に入っています。出典を

明らかにした正確で詳細なマップは各方面から期待されているので、スタッフは全力をあげて打ち込んでいます。

都立第五福竜丸展示館：東京 事務局長 安田和也

ビキニ水爆実験被災から55年

2009年はビキニ水爆実験被災から55年、2月22日（日）には、3・1ビキニ記念のつどいとして市民講座「久保山さんはなぜ死んだ—解剖所見から見えてくるもの—乗組員の健康について」が開かれます。講演は、聞間元医師。5月16日には、被災55周年・林光さんとの記念コンサートが予定され、第五福竜丸のテーマ「ラッキードラゴン・クインテット」（林光作曲・完成版）ほかを、ピアノ寺嶋陸也、日本フィル弦楽四重奏団が奏でます。

「第五福竜丸を伝える」ワークショップ

2008年11月1日には、第五福竜丸平和協会主催によるワークショップ「第五福竜丸を学び伝える」が開かれました。会には展示館を活用しての平和学習や見学授業、元乗組員大石又七さんの講演、第五福竜丸をテーマに演劇などに取組んだ教員や平和学を学ぶ大学生など40名が参加しました。3人の教員から「生徒と第五福竜丸をともに学ぶ日々」「保護者も誘い、実物を訪ねる授業」「第五福竜丸と出会って」という内容で報告があり、参加者からの

発言や意見交流がおこなわれました

戦争と平和の資料館・ピースあい ち：愛知・名古屋市

ボランティア 齋藤 孝

「ピースあいち」は、加藤たづさんという 86 歳になられる篤志家の寄付によって設立した民設民営の平和資料館です。常設展示のテーマは、①愛知県下の空襲、②戦時下の暮らし、③15 年戦争の全体像、④現代の戦争と平和の 4 つです。オープンしたのが 2007 年 5 月のこと。初年度の入館者は 1 万 1188 人。2 年目は 10 月末で 4710 名を数えます。開館 1 周年記念の特別展は「沖縄」をテーマに取り上げ、「沖縄から戦争と平和を考える」と題しました。記念講演には、元沖縄県知事の大田昌秀さんをお招きしました。

こうした資料館はリピーターを期待できません。このため、企画展、イベントで話題づくりをしています。企画展は、「ハンナのかばん展」、私立高校の生徒によるグループ展「15 歳の語り継ぐ戦争展」など 10 件。イベントでは、「戦争体験を聴く会」、「イラク帰還兵ウイリアム・アッシュ君講演会」など 29 件を数えます。今一つは、学校の団体見学の定例化で、市内の小学校に働きかけています。

管理・運営に関わる年間経費はざっと 600 万円。これを支えるのは正会員（年会費 6000 円）と賛助会員（同 3000 円）の会費です。行政（愛知県と名古屋市）からの資金援

助はありません。開館当初の会員数は正会員・賛助会員合わせて約 500 名でしたが、今は 700 名を越えました。正会員 500 名、賛助会員 1000 名にするのが私たちの目標です。

当館の運営は、野間美喜子館長・竹川日出男副館長・宮原大輔事務局長・竹内宏一事務局次長のもとで、NPO 法人の会員から選ばれた運営委員（20 名）が当たりますが、専従職員は事務局次長 1 人。このため、オープン前にボランティアを公募しました。幸いにして 62 名の応募がありました。その後、若干の出入りがあるが、現在は 70 名。最高齢の方は 86 歳が 2 人。1 人は中国戦線を転戦した陸軍の暗号兵。いま 1 人はパプアニューギニアから奇跡的に生還した方です。若い人は女子高生の 2 人。学校が休みの土曜日にやってきます。

竹内次長とともに、運営委員 2 名、ボランティア 4 名が毎日詰めています。ボランティアの仕事は、入口受付での観覧券の発売、展示室での案内、印刷物のプリント、会員への郵便発送事務などです。この他に戦時を語る「語り部」が 5～6 名、展示ガイドが 15 名ほどいます。

「語り部」は「ピースあいち」設立の目的を語ります。「私たちのような戦争を知っている世代は、やがて死んでいきます。すると空襲の恐ろしさ、戦争の愚かさを伝える人がいなくなります。しかし、モノは覚えていてます。そのモノによって二度と戦争を起こさせない、平和の尊さを訴えるために建てたのです」と。

モノは黙して語りません。だが、

展示室にしばらく佇んでいると、モノは語りかけてきます。来館者に渡すアンケート用紙には「平和へのメッセージ」という欄があります。頂いたメッセージは 1000 通を越えました。その 1 部は館内のボードに掲示してあります。メッセージを寄せてくださった方は、その声を聴いたに違いありません。

「ピースあいち」では、学校の団体見学・社会人のグループ見学に限って展示の解説をおこなっています。ガイド役はボランティアの皆さんです。こんなことがありました。小学生の見学が終わって玄関先まで見送りに出たとき、1 人の少年があるボランティアにサインを求めました。いまだきの子どもさんです。これに応ずると、ボクもワタシもといって人垣ができました。

また、後日、担当の先生から子どもさんらの感想文が送られてきました。6 年生の男の子の文章にこんな一節がありました。「〇〇さん、元気で長生きしてください」と。「私たちはやがて死んでいく」と言った「語り部」の言葉を受けての文章です。私たちは、こうした声に励まされて、ボランティアの仕事を続けています。

平和資料館「草の家」：高知市 明神 日向

草の家は夏、とても活発に活動します。そして秋にバイオミュージックコンサート(山の上のお寺で尺八やジャズのコンサート)を主催して

一息つき、冬の間は夏に比べるとひっそりと(大きなイベントを企画せず)、活動しています。

バイオミュージックコンサートは、今年も尺八の岸本寿男先生、ギターの蓮見昭夫さんをはじめ、伊太地山伝兵衛さんのギターボーカル、佐山雅弘さんのピアノ、石井康二さんのウッドベースが秋の終わりの竹林寺(高知市にあるお寺)に響き、集まった約 200 人のお客さん、関係者ともども癒されました。「草の家」は、音楽や絵、詩や劇といった芸術と共に活動しています。

“ひっそりと”と初めに表現しましたが、街頭でのシールを用いたアンケート「イラクでの侵略戦争反対・自衛隊撤退ピースアクション」はもう 330 回を越えました。月に 1 回、講師の方を招いて講演をしていただく「平和講座・文化講座」もおこなっています。それらの活動が定期的に続いていることは、とても大切なことであると思います。

環境保全とともに、平和憲法の本質を守り育てていく「憲法の森」。現在では、針葉樹の林から憲法の森になった頃には見ることはできなかった見事な紅葉を見せる森になりました。11 月 4 日には看板にペンキを塗って、より見栄えが良くなりました。

「草の家」は他の資料館に比べ、規模は小さいですが、たくさんの貴重な資料を保管しています。高知に訪れた際には是非、寄ってみてください。

**岡まさはる記念長崎平和資料館：
長崎市**

理事長・高實康稔

近況と直近の活動計画をお知らせします。

(1) 9月13日、ドイツの良心的兵役代替勤務者 Georg Freise (ゲオルグ・フライゼ) さんが来日。

(2) 10月4日、映画「南京・引き裂かれた記憶」(武田倫和監督)の本邦初上映。元日本軍兵士たちの証言による史実の実証。

(3) 10月6～8日、第6回国際平和博物館会議(京都)に理事長が参加し、多くの刺激を得る。

(4) 中国人強制連行長崎訴訟控訴審(福岡高裁)判決に来日の控訴人代表とともに臨む。不当判決に抗議。

(5) 11月2～3日、「記念在日殉難烈士・勞工骨灰送還祖国 55周年」(天津)に理事長が参加し、中国人原爆犠牲者追悼碑の建立(7月7日)について報告。

(6) 11月10日、在韓被爆者鄭南壽(チョン・ナンス)さんの被爆者手帳申請訴訟の地裁判決(勝訴)に臨む。被告長崎県知事の控訴(18日)に厳重抗議。(7) NPO法人としての第6回年次総会。役員改選と逼迫予算を承認。

(8) 12月15日、南京大虐殺生存者証言集会。張蘭英さん(80歳)の証言と劉相雲さん(南京大虐殺記念館研究員)の講演。

太平洋戦史館：岩手

法人設立7周年の総会が、2008年9月6日に東京都の品川区立総合区民会館で開かれました。会員の活動報告やインドネシアからの来賓を迎えての会員との交流もありました。

2008年8月11日～22日に、朝日新聞大阪本社1階のアサコムホールで「ニューギニア放置遺骸写真・遺留品展」を開催しました。

Tel: 0197-52-3000 Fax:0197-52-4575

釜石市郷土資料館：岩手

2008年度釜石艦砲戦災展「くらしに見る戦中戦後」が、釜石市郷土資料館の特別展示室で、2008年7月11日～9月7日の会期により開かれました。前期の7月11日～8月10日が「戦時下のかまいし」で、後期の8月11日～9月7日が「復興への道のり」でした。今回の釜石艦砲戦災展は、釜石市民がどのようにして戦中を過ごし、戦後の復興に努めてきたのかを「くらし」という視点で考えてみるものでした。

近代以降「鉄と魚の街」として大きく発展してきた釜石が不況や1933年の三陸大津波の被害から立ち上がり、釜石市として新たなスタートを切ったその年に戦争が始まります。戦況が厳しくなるにつれ、男達は戦場に赴き、街では空襲に備える訓練が続くようになります。子供達はつぎつぎと疎開し、今の中高校生に当たる生徒が通うのは学校ではなく工場…。そして釜石市は終戦間際の1945年7月と8月、2度にわたって連合軍による艦砲射撃を受け

ました。2度の攻撃で多くの人命がうしなわれ、街は廃墟と化しました。終戦で国の方向が180度変わる混乱の最中、市民は製鉄所を軸に街の復興に取り組みました。

市民が生きるために使っていた生活用具や記録が、当時の「くらし」の様子をうかがわせてくれます。戦争から60年以上が経過し、当時の記憶を語る人も少なくなりつつあります。再び戦争による悲劇を繰り返すことの無いように、釜石が受けたその惨禍を伝え、恒久平和の願いを発信していくことが、釜石市郷土資料館の戦災展の趣旨です。

前期の展示構成は次のようです。

1. 戦前の釜石

大正から昭和初期まで続いた経済危機のため、鉄鋼業界も不況にあえいでいましたが、満州事変以降再び鉄の需要が拡大すると好況に転じます。日本が戦時体制を強めていく中、鉄の安定した供給が求められるようになり、官営八幡製鉄と釜石製鉄所も含む民営の製鉄所が合同し、1934年2月1日、日本製鉄株式会社が設立されました。釜石製鉄所も拡張計画が進められ、構内にあった社宅街を中妻、小佐野・小川地区へ移転して工場用地を広げ、1938年には第10高炉竣工火入れ、1940年には日産400トンの大型工場が始業するなど設備・生産の増強が図られました。

2. 強まる軍事色

日本が軍事色を強めていく中、市民生活も戦時色一色となっていきました。1938年には国家総動員法が制定され、国民の生活・経済は国によって統制されます。1940年、部

落会・町会が制度化されると、町会の下組織として隣組がつくられますが、これは住民を動員するための組織でもありました。子供の遊びや学校教育にも戦争の影がみられるようになります。

3. 銃後もまた戦場

人びとは、男女別、各年齢層によって動員されていきます。成年男性は大半が兵隊として出征し、残りの人びとも徴用工として、産業報国隊員として製鉄所などの工場で働かされたり、警備隊や消防隊などへ動員されたりしました。成年女性は大日本婦人会の会員となり、出征兵士や各職場の激励、慰問などの活動をしました。学生たちも例外でなく、勤労学徒として製鉄所等の工場へ動員されていきました。

また、製鉄所や鉱山などでは、人手不足をおぎなうため、連合国捕虜や中国・朝鮮半島から連行されてきた人びとも作業に従事させていました。釜石には仙台捕虜収容所第4分所（大橋）、第5分所（釜石）が設置されており、捕虜達は製鉄所や鉱山での厳しい労働に従事させられていました。彼等のうち33人が栄養失調や衰弱、病気により亡くなり、そのほか35名が艦砲射撃によって亡くなっています。

4. 空襲への備え

釜石は東北で唯一の製鉄所をもつ軍需都市であったため、大規模空襲にみまわれることが予測されていました。各地に監視哨が配置され、高射砲連隊が駐屯していました。建物疎開や公共防空壕・防火用水の整備、防火体制の強化がなされ、官民一体

となった防空訓練も盛んにおこなわれていました。各家庭では窓ガラスに飛散防止の紙テープを張り、防火水槽や火たたきを備え付けていました。1945年3月10日東京は大空襲を受け、同日盛岡もB29による空襲を受け、駅前には焼け野原となりました。これをみて、岩手県は釜石市の国民学校初等科（現在の小学校）の児童の集団疎開を勧告、同年4月と5月に集団疎開が実施されました。また、一般家庭の縁故疎開や家財道具の疎開もおこなわれるようになっていきました。

後期の展示構成は次のようです。

1. 廃墟からの出発

1945年7月14日、釜石は本州初の艦砲射撃を受けました。砲撃は12時10分から14時10分まで続き、2560発もの砲弾が打ち込まれました。第1回目の艦砲射撃では製鉄所を中心に砲撃が集中し、鈴子・只越地区、嬉石・松原地区などが大きな被害を受けました。防空壕に避難した市民の中には砲弾の破片や爆風で死傷する者、壕の崩壊で圧死する者が相次ぎ、さらに艦砲射撃による火災が発生し、街は焼野原となりました。

8月9日、長崎に原子爆弾が投下された同日、釜石に対して2度目の艦砲射撃が実施されました。この日の砲撃は12時47分から14時45分まで続き、2781発の砲弾が打ち込まれました。第2回目の艦砲では再び製鉄所が攻撃されたほか、中妻、小川・小佐野の社宅街などが被害を受け、多くの住民達が犠牲となりました。また、1回目の艦砲射撃で被

害の少なかった大渡・東前近辺が火災により焼失しました。製鉄所は第1回目の被害から辛くも復旧し操業を再開できる状態になっていましたが、この攻撃により工場は完全に破壊され、機能を停止してしまいました。

2度の艦砲射撃により街は廃墟と化しました。多くの人びとが負傷し、あるいは命を奪われ、また財産を失いました。死者の中には連合軍捕虜、中国・朝鮮半島からの強制連行者、軍関係者も含まれています。軍関係者のうち特に多いのは、7月14日釜石沖に停泊中艦砲射撃を受け、沈没した第48号駆潜艇の乗員で、28名が死亡しています。艦砲射撃とあわせて、艦載機による機銃掃射がおこなわれましたが、米軍による記録が残っておらず、詳細は不明となっています。機銃掃射では釜石のみならず近隣する市町村でも被害を受けています。

2. 新たな戦い

終戦は新たな戦いである困窮生活との戦いの始まりでもありました。戦時教育からの脱皮も目指されました。

3. 復興への道

2度の艦砲射撃によって釜石の町は焼野原となり、釜石の象徴である釜石製鉄所は壊滅的な被害を受けて操業を停止していましたが、市民の復興への熱意から復旧工事がすすめられ、1948年5月には第10高炉火入式を挙行、操業が再開されました。

4. 平和都市・釜石市

1950年、観音寺に平和観音像が迎えられます。1954年には薬師山

上に平和像が建立されました。市民の中からも戦災死者の霊を弔おうという活動が生まれました。釜石市では1959年には世界平和と戦争の追放を謳った「平和都市宣言」が議会で採択されています。

前期・後期とも解説資料を作成しています。

関連して、2008年9月14日に、釜石市民文化会館の中ホールで、下川原孝さん・伊藤艶子さん・末永里志さん・千田ハルさん・坂野のぼるさんらの戦争体験者による体験談を聞く会が開かれました。あわせて、ビデオ「艦砲射撃 釜石戦災記」が上映されました。また、会場内で郷土資料館所蔵写真パネルが展示されました。

Tel&Fax:0193-22-2046

<http://www.city.kamaishi.iwate.jp/kyoudo/index.html>

仙台市歴史民俗資料館：宮城

2008年10月4日に、『ガイドブック 仙台の戦争遺跡 2008』が刊行されました。

Tel:022-295-3956 Fax:022-257-6401

<http://www.city.sendai.jp/kyouiku/rekimin/>

登米市歴史博物館：宮城

企画展「語り継ぐ登米市の学童疎開」が2008年10月11日～11月30日の会期により開かれました。戦時中、登米地方に疎開した子どもたちの苦勞と受入れた地域の人びとのよ

うすを伝えるものです。

Tel:0220-21-5411

<http://www.city.tome.miyagi.jp/reakihaku/>

埼玉県平和資料館：東松山市

企画展「体感、実感、資料館！－戦時の暮らし、みて、ふれて」（学校教育連携企画1）が、2008年7月19日～9月28日の会期により開かれました。平和資料館で毎日上映しているアニメ映画「青い目の人形物語」「最後の空襲くまがや」を深く理解するためのコーナーや、教科書や資料集などに掲載されている資料を展示したり、手にとってみることのできるコーナーもありました。

青い目の人形コーナーでは、ミルドレッド・ルシール（所沢市立見三ヶ島小学校蔵）、市松人形（所沢市立三ヶ島小学校蔵）、マーサ・ヒース（越谷市立大沢小学校蔵）、マーサ・ヒースの妹サラ（越谷市立大沢小学校蔵）などを展示しました。

熊谷空襲コーナーでは、焼け跡から掘り出されたもの（観音像、法具、茶器など）、空襲後の熊谷の写真、空襲体験証言などを展示しました。

戦時の暮らしと人々コーナーでは、出征たすき、戦場に送った手紙、配給品（服・タオルなど）、陶製釜、布製ランドセル、放水器などを展示しました。

学校と子どもたちコーナーでは、小学校で使用した机・いす、国民学校卒業証書、小学生の日記、疎開した学童たちが使った机・木刀・なぎなた・食器などを展示しました。

ハンズオンコーナー（資料にふれて学ぶコーナー）では、千人針、国民服、小学生の日記、防空頭巾、軍靴、もんぺなどを展示しました。

学習コーナーでは、疎開先にとどいた学童へのはがき、学童が疎開先から家族に送った手紙、戦地の兵士からとどいた家族へのはがきなどを展示しました。

メッセージコーナーでは、小中学生が答えたアンケートなどを掲示していました。

ワークシートも用意していました。

テーマ展「世界の人々の幸せのためにー埼玉県出身の国際ボランティアを中心に」（学校教育連携企画2）が地下1階の分類展示室で、2008年8月9日～10月5日の会期で開催されました。埼玉県出身またはゆかりの人びとが国際平和貢献のために活動している様子を写真パネルや資料等で紹介しました。

ギャラリー展「平和資料館ポスター展」が10月11日～12月14日の会期により開催されました。平和資料館は1993年8月にオープンし、今年で開館15年目を迎えました。これまで、平和資料館では、県民と戦争の関わりについての企画展やテーマ展を数多く開催してきました。この展示会は資料館が保存しているこれらの展示のポスターを紹介し、その歩みを振り返るものです。

夏休み企画「平和資料館で自由研究」が8月1日～31日に開かれました。小学生から高校生を対象にして、夏休みの自由研究で、戦争と平和について調べるために、調べ方やまとめ方などを資料館の職員がアド

バイスしました。

平和朗読会は、戦争や平和をテーマとした文学作品の朗読を生演奏のBGMと共に聴くものですが、2008年度の第1回が7月26日に開催されました。

第2回平和朗読会は10月25日に開かれ、北本市の朗読グループ「かばざくら」のメンバーの方が「慟哭」・「字のないはがき」・「一本の鉛筆」・「被爆体験記」などの平和や戦争に関する作品を朗読しました。

戦争体験者との交流会は、戦争体験者との交流をとおして、戦争の悲惨さと平和の尊さを考えるものですが、2008年度の第1回が8月23日に開かれ、蘆田央子さんが、実際に学生として体験した戦時中の教育や学校生活の様子について話しました。

2008年7月の映画会は、7月12日にアニメ映画「海からぶたがやってきた」とアニメ映画「ちいちゃんのかげおくり」を上映しました。

8月の映画会は8月16日に、日本映画「父と暮らせば」を上映しました。これは井上ひさしの原作を映画化したもので、原爆投下から3年後の広島で、苦悩の日を送る主人公が、悲しみを乗り越え、未来に目を向けるまでの物語です。

9月の映画会と関連講演会は9月20日に開かれました。アニメ映画「象のいない動物園」を上映しました。これは、戦時中の日本で、爆撃により動物園から町に逃げ出すのを防ぐために殺された動物たちの物語です。関連して、映画の上映前に、講演会が開かれ、当時の上野動物園

の状況などについて、埼玉県こども動物自然公園の園長さんが話しました。

10月の映画会は10月11日に開かれ、日本映画「せんせい」を上映しました。

11月の映画会は11月8日に開かれ、日本映画「黒い雨」を上映しました。これは、広島における被爆者の日常生活を通して戦争を見つめ、生きることの意味を問いかける作品です。

Tel:0493-35-4111 Fax:0493-35-4112

<http://homepage3.nifty.com/saitamapeacemuseum/>

丸木美術館：埼玉・東松山市

企画展「丸木俊 絵本の世界展—鮮やかな色彩の交響曲」が2008年7月5日～9月6日の会期で開催されました。丸木俊は、夫・位里との共同制作《原爆の図》をはじめとする画業の一方で、生涯に150冊を超える絵本や挿絵、装幀の仕事を残しました。戦時中に出版された南洋の絵本からはじまり、戦後は外国や日本各地の童話や民話、創作絵本、そして原爆や水俣病、沖縄戦などの記録絵本と、幅広いジャンルを手がけているのも大きな特徴です。繊細な筆づかい、鮮やかな色彩のもたらずその豊穡な世界は、見る者の心を強く惹きつけ、1971年にチェコスロバキアのブラチスラヴァ国際絵本原画展でゴールデンアップル賞を受賞するなど、国内外で高い評価を受けました。今回の企画展では、初期の

代表作『ヤシノミノタビ』（1942年帝国教育出版部刊）から最晩年の絵本『どんぶらこっこすっこっこ』（1999年福音館書店刊）まで、絵本原画やさまざまな関連資料をもとに、絵本作家としての彼女の足跡を紹介しました。

企画展「今日の反核反戦展2008」が2008年9月13日～10月25日の会期で開催されました。

企画展「シシュポス・ナウー罪と罰のでんぐり返し」が2008年11月2日～2009年1月10日の会期で開催されています。コリント王シシュポス(Sisyphus)は、ゼウスに背き死神をだましたため死後地獄に落とされ、大理石の大石を山頂に押し上げる罰を課せられました。この企画展はシシュポスの労役が新たな世代に受け継がれ、あいは意味を変換され、つぎつぎに連鎖して永続する創作活動の現在として丸木美術館に展開されるものです。東京芸術大学出身の7人の現代美作家による展覧会ですが、これらの新たな世代の作品群がここに労役として接続されることで、丸木位里、俊が「原爆の図」などで現した作品群と連動することになります。

Tel:0493-22-3266 Fax:0493-24-8371

<http://www.aya.or.jp/~marukimsn/top/kikaku.htm>

蕨市立歴史民俗資料館：埼玉

第19回平和祈念展「駅弁・記念切符でたどる戦中・戦後」が、2008年8月1日～9月30日の会期によ

り開催されました。1931年の満州事変から1945年の太平洋戦争までの間、多くの人びとが戦場へと送られ、尊い生命が失われ、人びとは極限の生活を強いられることとなりました。この悲劇を2度とくり返さないためにも「戦争」という事実・記憶を次の世代に伝えていかなければなりません。今回の展示会は、戦中・戦後の時代を色濃く反映した駅弁の包装紙や記念切符を中心に紹介しながら、平和の尊さを考えていくものでした。

戦前の駅弁包装紙・記念切符では、「満州軍総司令部の凱旋記念切符」、幻の「東京オリンピック大会開催決定記念乗車券」、幻の「万国博覧会回数入場券」、「イタリア親善使節団来訪記念乗車券」、「漢口陥落記念乗車券」、「ニッポン世界一周大飛行完成記念乗車券」「奉祝紀元2600年記念駅弁包装紙」、「紀元2600年記念乗車券」などを展示しました。

戦中の駅弁包装紙・記念切符では、「支那事変三周年記念駅弁包装紙」、「戦地偲んで感謝の節米」・「節米報国銃後の務め」などの戦時スローガン入り駅弁、「大東亜戦争一周年記念駅弁包装紙」、日本が当時植民地としていた韓国の鉄道駅で販売された駅弁包装紙、「味付野菜パン」・「肉入り饅頭」などの代用食駅弁、東京大空襲で被災した人びとに交付された「罹災者乗車整理票」などを展示しました。

戦後の駅弁包装紙・記念切符では、「進駐軍専用切符」、「日本国憲法公布記念乗車券」、「外食券御弁

当」、「サンフランシスコ平和条約発効記念乗車券」などを展示しました。

駅弁包装紙・記念切符以外にも、蕨市の空襲被害などについても展示しています。リーフレット型の図録を作成しています。

Tel:048-432-2477

<http://www.city.warabi.saitama.jp/rekimin/index.htm>

埼玉県立歴史と民俗の博物館：さいたま市

常設展の中のトピック展示「戦時下の埼玉」が2008年8月～11月に開かれました。構成は、1. 戦時体制への序章、2. 日中戦争から太平洋戦争へ、3. 戦争の長期化と戦局の悪化、4. 戦災の増加と終戦、です。1. では、大政翼賛会埼玉支部資料、愛国百人一首、神国日本の道、上海事件の新聞号外などを、2. では、衣料切符、戦時貯蓄債券、開戦の詔書などを、3. では、防空電球笠などを、4. では、アメリカ軍機が投下した不発弾、特攻隊顕彰や遺族慰問資料、疎開児童感想綴などが、展示されました。

Tel:048-645-8171 Fax:048-640-1964

<http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/>

東京大空襲・戦災資料センター：東京・江東区

2008年度第1回特別展「記憶のなかの神戸空襲－豊田和子原画展

下町の暮らしと戦争」が 2008 年 8 月 6 日～9 月 7 日の会期により開催されました。豊田和子さんの画文集『記憶のなかの神戸』の原画と神戸空襲絵巻を展示しました。豊田和子さんの絵は、神戸の下町での子どもころの暮らし、それが戦時体制で崩されていくさま、神戸空襲、戦後直後の暮らしを描いたものです。あわせて、東京・砂町のこどもたちの 1920 年代ごろの遊びを宮坂栄一さんが描いた絵も展示しました。

関連して、2008 年 8 月 23 日に「空襲を映像で伝える－神戸、東京、長崎の若い世代から」が開催されました。神戸空襲を映像で伝えている兵庫県立須磨友が丘高等学校の放送部のみなさんと、東京大空襲を映像で伝える昭和女子大学付属中学校・高等学校放送部のみなさんが、それぞれの作品の発表をし、長崎からも青少年ピースボランティアの高校生や大学生のみなさんも参加し、被爆地ナガサキからの発表をしました。

8 月 30 日にはギャラリートーク「「伝えていく」ということ」が開かれ、豊田和子さん、映画「火垂るの墓」監督の日向寺太郎さん、神戸空襲を記録する会代表中田政子さんの 3 人の講演と対談がありました。

特別公演・一人音楽劇「猫は生きている」が 2008 年 8 月 16 日・17 日に 2 階会議室で上演されました。これは、フジテレビ「浅見光彦シリーズ」や「江戸糸操り人形芝居・牡丹燈籠」などを手がけた脚本家・大久保昌一良さんが、東京大空襲を描いた絵本『猫は生きている』（原作・早乙女勝元さん、絵・田島征三

さん)を一人音楽劇に仕上げたものです。出演と歌は福井淑恵さんで作曲・ピアノ演奏は大友剛さんです。16 日には早乙女勝元さんと大久保昌一良さんの対談もありました。

夏の親子企画「空襲体験のお話と紙芝居の会」が開かれました。これは、大人から小さな子どもまで、「見て、感じて、学んで」もらえる紙芝居を鑑賞するとともに、体験者の話を聞き、人から人へ体験と平和への思いを伝えるものです。2008 年 7 月 26 日には、紙芝居『あしたのやくそく』（作画吉村勲二・ミエ）を大貫勝敏さんが演じ、体験者の江角恵子さんが話し、8 月 2 日には紙芝居『ガラスのうさぎ』（作高木敏子・画加太こうじ）をまるのめぐみさんが演じ、体験者の橋本代志子さんが話し、8 月 9 日には紙芝居『コスモスの花はさいたけど』（原作画葛飾区立細田小学校児童）と紙芝居『ゴローのさけび』（作画斉藤昭一）を斉藤昭一さんと宮沢一夫さんが演じ、体験者亀谷敏子さんが話し、8 月 23 日には、中村昭三さんが胡弓と朗読劇『炎の町の白い花』（作さねとうあきら）を演じ、体験者の二瓶治代さんが話しました。

東京大空襲・戦災資料センター学習講座が開催されました。戦災資料センターとしては、はじめての学習講座で、戦争災害研究室の研究員を講師として 2 階会議室で開きました。第 1 回は 10 月 20 日に館長の早乙女勝元さんが「開講にあたって－東京大空襲・戦災資料センターの今日的意義と次世代への期待」を、第 2 回は 11 月 3 日に一橋大学大学院教授

で戦争災害研究室長の吉田裕さんが「アジア・太平洋戦争と東京大空襲」を、第3回は11月17日に主任研究員・学芸員の山辺昌彦さんが「戦災資料センターの空襲展示について」を、第4回は12月1日に主任研究員の青木哲夫さんが「防空と疎開―その理念・政策・実際」を、第5回は12月15日に、研究員の山本唯人さんが、「空襲被害者への補償問題、世界の無差別爆撃」をそれぞれ話し、12月15日には山本さんが「戦災資料センター展示のモデルガイド」もおこないました。

2008年度第2回特別展「高校生たちが見た東京の空襲被災樹木展」が2階会議室で、2008年11月19日～12月27日の会期により開催されました。2008年春から夏にかけて、都立芝商業高校の生徒たちが、都内に残る被災樹木を訪れ、樹木たちの姿を個性豊かなレポートに仕上げました。その中から厳選された約50点を展示しています。

関連して、墨田区飛木稲荷、浅草寺、芝公園4号地の被災樹木をめぐるフィールドワークが、11月22日に都立芝商業高校の生徒たちの案内で開かれました。

12月6日に元都立高校教諭で、被災樹木研究者の唐沢孝一さんによる講演「被災樹木が伝えるもの」が、12月14日には、都立芝商業高校の生徒たちによる映像＋発表「高校生たちの見た被災樹木」が、いずれも2階会議室で開催されました。

戦争災害研究室の第19回研究会は2008年7月13日に政治経済研究所で開催され、佐々木和子さんが

「大阪湾岸地域への空襲研究の現状」と題して報告しました。

第20回研究会は2008年9月14日に政治経済研究所で開催され、黒田康弘さんが「帝国日本の防空論―木造家屋密集都市と空襲」と題して報告しました。

第21回研究会は2008年11月29日に政治経済研究所で開催され、木村豊さんが「戦後日本社会における「東京大空襲」運動史―2つの市民運動を中心に」と題して報告しました。

Tel : 03-5857-5631 Fax : 03-5683-3326

<http://www.tokyo-sensai.net/>

わだつみのこえ記念館：東京

2008年8月13～16日に、東京江戸博物館ホールで「『学徒出陣』65周年記念 講演と映像ドキュメント・戦没学生遺稿展」が、わだつみ会と共催で開催されました。遺稿展では常設展の資料の他、京都大学、明治大学、学習院大学所蔵の遺稿や関連資料、遺稿の館蔵複製資料なども展示しました。講演では15日に近藤一さんが中国と沖縄での戦場体験を話しました。16日には長編ドキュメンタリー映画「ひめゆり」を上映しました。会期中、館蔵のビデオも上映しました。

2008年12月1日に、中央大学駿河台記念館で「わだつみ会 12・1 不戦の集い―学徒出陣 65周年」が、わだつみ会と共催で開催されました。前田朗さんが「軍隊のない国家を訪ねて―憲法九條を活かすために」と

題して講演しました。1943 年文部省制作「学徒出陣」の上映などもありました。

Tel&Fax:03-3815-8571

<http://tokyo.cool.ne.jp/wadatsumikai/>

中野平和資料展示室：東京

平和企画展示は、平和について幅広い視点からとらえ、日常的に見つめ直す機会となるよう、戦争被害に関する記録写真やさまざまなテーマを取り上げ、一定の期間展示をするものです。

2008 年度第 1 回 平和企画展「中野の空襲」が平和資料展示室で 6 月 7 日～30 日の会期により開催されました。

第 2 回 平和企画展「広島・長崎の原爆記録写真」が平和資料展示室で 8 月 20 日～31 日の会期により開催されました。63 年前の 8 月 6 日に広島、そして 9 日には長崎に原子爆弾が相次いで投下され、一瞬にして多くの尊い命が奪われました。そして今もなお人びとの心に深い傷跡を残し、多くの被爆者が後遺症などにより苦しんでいます。被爆の実情を、戦争を知らない若い世代へとしっかりと伝えていかなければなりません。原爆投下前後の広島・長崎の写真と、街や人びとの様子を撮った写真などを展示しました。

Tel:03-3228-8988 Fax:03-3228-5644

<http://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/016/03/d00700024.html>

豊島区立郷土資料館：東京

夏の収蔵資料展&第 3 回新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館「描かれた風景、写された時代、遺された記憶」が 2008 年 7 月 9 日～10 月 5 日の会期により開催されました。池袋モンパルナスに居住した画家による風景画と、その作品にまつわる写真を展示しました。また、資料館が長年にわたって取り組んできた“戦争を考える夏”シリーズの一環として、空襲体験者が描いた空襲画もあわせて展示しました。

風景画では、高山良策の「池袋駅東口のヤミ市」、杉浦茂の「池袋空襲」、吉井忠の空襲の実態や空襲後の風景を描いたスケッチなどを展示しました。空襲記録写真では、石川光陽が撮影した豊島区内の 3 月 4 日と 4 月 14 日の空襲の写真や防空演習の写真を展示しました。

池袋モンパルナスで活躍した芸術家たちに思いを馳せるとともに、空襲画や被災資料を通して戦争と平和の問題についても考えるものでした。Tel:03-3980-2351 Fax:03-3980-5271

<http://www.museum.toshima.tokyo.jp/top.html>

昭和館：東京・千代田区

特別企画展「戦中・戦後をともにした動物たち」が 3 階の特別企画展示室で 2008 年 7 月 26 日～8 月 31 日の会期により開催されました。

先の大戦中、戦争の長期化に伴って身近な動物が軍用品をはじめ毛皮用や食用など資源として扱われ、農

耕馬が軍馬に徴発されたり、飼い犬の献納運動が推進されました。さらに動物園では、空襲で逃亡した動物による被害を防ぐため猛獣処分も実施され、動物にとっても戦争は暗い影を投げかけました。一方、戦後の復興期には動物が明るい話題を提供し、人びとの心を慰めてくれました。本展では、戦中・戦後を通して人間と動物とのかかわりを、実物資料・写真・手記などで紹介しました。

展示構成としては、1の「身近になった動物」では、忠犬ハチ公や教科書やマンガなどでとりあげられた動物や、めずらしい動物を、2の「戦時下の動物たち」では、軍用馬・軍用犬・軍用鳩、猛獣処分、ウサギの飼育奨励と献納運動、狂犬病予防としての犬の供出、ハチ公像の回収などを、3の「戦後復興期の動物たち」では、戦後の食糧事情、ハチ公像復活、ゾウ列車などの子どもたちに夢を与えた動物園について、それぞれ展示していました。図録を刊行しています。

関連して講演会が、2008年8月10日に九段会館で、開かれ、「ぞうれっしゃがやってきた」作者の小出隆司さんが講演しました。

Tel:03-3222-2577 Fax:03-3222-2575

<http://www.showakan.go.jp/>

渋沢史料館：東京・北区

テーマ展・シリーズ“平和を考える”「渋沢栄一と青い目の人形－81年前の“The Doll Project”」が2008年7月19日～8月24日の会

期により開催されました。渋沢史料館は、日本の近代経済社会の基礎を築いた渋沢栄一（1840 - 1931）の事績と思想、栄一の生きた時代に関する資料を収集、保存、調査研究、展示し、さまざまな関連事業をおこなっています。渋沢史料館では、毎年夏に「テーマ展シリーズ“平和を考える”」と題して、平和に関連する資料を紹介しながら展覧会や催し物を開催しますが、2008年が第1回です。

1927年、アメリカから日本へ、日米の親善を願い約12000体の人形が太平洋を越えて贈られました。1924年、アメリカで「排日移民法」が成立する前後、日本人移民の排斥運動が過熱し、日米関係が悪化しました。そうした事態に心を痛め、日米関係の改善に民間から取り組んだのが、渋沢栄一と親日家のシドニー・ルイス・ギュリックでした。ギュリックが中心となり、全米48州から集めた平和の使者「青い目の人形」を日本に贈り、その返礼として日本からは、渋沢がまとめ役となり58体の「答礼人形」を贈りました。渋沢とギュリックの日米親善への強い思いが人形に託され、両国の子どもたちの間で友好と信頼を築くことができたのです。

しかし戦争により、日本では「青い目の人形」は敵国の人形として扱われ、その多くが失われました。互いの国が人形たちを忘れかけていた時期もあり、現在日本には約300体、アメリカには44体の人形が確認されるだけになりました。

2008年のテーマ展では、東京で

現存が判明している 10 体のうち 8 体の人形を展示しました。81 年前と変わらずに平和と友情の大切さを伝える人形たちのメッセージに耳を傾け、渋沢栄一たちが願った「世界平和」の思いを多くの方に知っていただく機会とすることが開催趣旨でした。

関連して、ミニシンポジウム「渋沢栄一と青い目の人形—81 年前の“The Doll Project”」が 7 月 20 日に渋沢史料館の会議室で開かれ、大妻女子大学准教授の是沢博昭さん、財団法人渋沢栄一記念財団理事長の渋沢雅英さんが報告しました。

テーマ展に関連する児童書『青い目の人形メリーちゃん』の読み聞かせが、7 月 21 日には北区おはなしの会の郷和子さんにより、8 月 17 日には元小学校教諭の稗雅子さんにより、それぞれおこなわれました。

関連して映画上映会 I が渋沢史料館の会議室で 7 月 19 日・21・23 日、8 月 3・6・10・13・15・20・24 日にそれぞれ開かれ、埼玉県平和資料館製作のオリジナルアニメーション映画「青い目の人形物語」を上映しました。

映画上映会 II が渋沢史料館の会議室で 7 月 27 日と 8 月 23 日に開かれ、東映製作の「青い目の人形」を上映しました。

7 月 19 日、23 日、8 月 20 日に、紙芝居「青い目の人形シャロンちゃん」（あきる野市戸倉小学校 創立 130 周年記念に当時の 3.4 年生が製作）を紹介しながら、展示の解説をおこないました。

Tel: 03-3910-0005

<http://www.shibusawa.or.jp/museum/>

戦争体験文庫 in 代官山:東京・渋谷区

奈良県代官山 i スタジオで、「戦争体験文庫 in 代官山—子どもたちが見た戦争」が 2008 年 8 月 6 日～18 日の会期で開かれました。奈良県立図書情報館内「戦争体験文庫」所蔵資料から戦争当時の子どもたちの姿を知ることができるものを展示しました。また、実写版の映画公開にあわせて「火垂るの墓」の作者である野坂昭如氏の戦争関連書籍や、戦争をテーマとした絵本のコーナーも併せて設置しました。

展示構成は、1. 子どもたちが見た満州、2. 子どもたちが見た軍隊、3. 空襲と学童疎開、4. 子どもたちが見た戦後の社会、です。1 では、満州修学旅行、満州建設勤労奉仕隊、満蒙開拓青少年義勇軍などについて、2 では、国民学校教科書、小学生の日記、少年飛行兵募集ポスターなどを、3 では、疎開中の絵日記や、神戸大空襲などについて、4 では、神戸空襲で家を失った女学生の日記や、戦後の学校、通知票の変化、児童雑誌の変化などについて、展示していました。解説資料を作成しています。Tel: 0742-34-2111 Fax: 0742-34-2777

<http://www.library.pref.nara.jp/sentai/gallery.html>

八王子市郷土資料館：東京

コーナー展「少国民とよばれた子どもたち」が郷土資料館1階特別展示室特設コーナーで、2008年7月29日～8月31日の会期により開かれました。戦時下、男の子は兵士として戦線で戦い、女の子は母として銃後を守る立派な大人になるという期待をこめて「少国民」と呼ばれていました。子どもたちがお国のために尽くす「少国民」でなければならなかった時代の生活を八王子に残る資料から振り返り、子どもたちと平和について考えてみるものです。国民学校と大日本青年団、八王子市が受け入れた学童疎開などについても展示していました。

関連して、空襲体験を語る会が2008年7月29日に郷土資料館集会室で開かれ、郷土資料館のガイドボランティアが太平洋戦争や当時の生活を自分の体験を交えながら話しました。

八王子空襲を聞く会が2008年8月9日に郷土資料館集会室で開かれ、第一国民学校（現・市立第一小学校）の教師であった渡辺マサ子さんが八王子空襲や当時の子どもたちの生活を話しました。

Tel:0426-22-8939 Fax:042-627-5919

<http://homepage3.nifty.com/hachioji-city-museum/>

東村山ふるさと歴史館：東京

企画展「陸軍少年通信兵学校」が2008年7月19日～9月7日の会期により開かれました。東村山ふるさと

歴史館では2007年度に企画展「あの日々の記憶－東村山の空襲と学童疎開」を開催し、「戦争」について語り継いでいくことにより、平和の大切さを市民とともに考えていく展示をしました。

2008年は、東村山に設置された軍事施設である「陸軍少年通信兵学校」（のち東京陸軍少年通信兵学校）について取り上げました。同校は、通信技術の発達に対応できる若年層の下士官養成機関として開校し、1942年10月に東村山の地に移転してきました。全国から受験し合格した15歳前後の少年たちが、モールス信号の送受信や通信機の取扱い等の厳しい訓練を受け、寝食を共にしていました。彼らは戦地に転戦し、作戦命令や報告を通信し、あるいは東村山の地で終戦を迎えました。戦後、東京陸軍少年通信兵学校の建物は高等通信講習所や外地引揚者の寮に使用され、さらにそれを利用して東村山中学校（現 第一中学校）も開校、その後も兵学校跡敷地に南台小学校、明治学院東村山高等学校、明法学院高等学校、日体桜華女子高等学校などが設置され、現在の富士見町は東村山の文教的な地域となっています。

今回の展示を通して、戦争という時代の様相を体感してもらう趣旨で開かれました。歴史館は今後も戦争の「記憶」を「記録」にとどめる作業を積み重ねていく予定です。展示図録を刊行しています。

関連して、講演会「陸軍少年通信兵学校」が2008年8月2日に開かれ、ふるさと歴史館の職員が少年通

信兵の募集・試験、東村山と陸軍少年通信兵学校について話しました。講演会資料のコピーを有償頒布していました。

Tel : 042-396-3800

<http://www.city.higashimurayama.tokyo.jp/~kakukaweb/052000/index02.htm>

東大和市立郷土博物館：東京

「多摩の戦跡写真パネル展」が1階エントランスロビーで2008年8月5日～31日の会期で開催されました。

Tel : 042-567-4800

<http://www.e-yamato.or.jp/city/museum/>

府中市郷土の森博物館：東京

特別展「発掘！府中の遺跡 発掘された戦争の記憶&調査速報」が本館1階特別展示室で2008年7月19日～8月31日の会期により開かれました。府中飛行場に程近い市内白糸台には、奇妙な鉄筋コンクリート製の建造物が残されています。太平洋戦争末期に、戦闘機・飛燕を格納するために建造された掩体壕です。こうした戦時下の遺跡は近年になって考古学の調査・研究の対象としてクローズアップされています。

今回の特別展は、府中市域や調布飛行場周辺の戦時下の様子を発掘調査資料からたどり、掘り起こされた戦争の記憶を通して、戦争と平和を考える機会にするものです。構成は、1. 近代化される軍隊、2. せまり

くる戦争、3. 調布飛行場とその周辺、4. そして終戦、です。リーフレット型の図録を作成しています。

関連して、文化財対談「調布飛行場をとりまく戦争遺跡」が調布市郷土博物館の金井安子さんと府中市文化振興課江口圭さんにより、本館大会議室で2008年7月27日におこなわれました。

TEL 042-368-7921

<http://www.fuchu-cpf.or.jp/museum/index.html>

福生市郷土資料室：東京

企画展示「平和のための戦争資料展」が2008年7月12日～9月28日の会期により開かれました。太平洋戦争後60年を過ぎた現在、戦争の記憶は薄れつつあります。福生市郷土資料室では8月15日の終戦の日にあわせて戦争関連の資料を展示し、福生と戦争の歴史について考えてきました。

2008年の企画展示でも近代戦争の始まりである日清戦争から太平洋戦争までの歴史を、福生地域の郷土資料を通じて紹介しました。現在の尊い平和についてもう一度見つめ直してもらうために開かれたものです。

主な展示資料は、熊川・南田園に落ちたアメリカ軍の爆弾破片、アメリカ軍の伝単、家屋焼失証明書、福生第一小学校防空日誌、山田耕笹の似顔絵入りのサインが描かれた日の丸、軍事郵便、明治期の日清日露戦争錦絵などです。

Tel : 0425-53-3111

<http://www.city.fussa.tokyo.jp/t>

own/m005/32iopi0000004uv7.html

武蔵村山市立歴史民俗資料館：東京

特別展「武蔵村山の戦争遺跡」が2008年10月25日～12月7日の会期により開かれました。東京陸軍少年飛行兵学校跡地が市の文化財に2007年7月10日に指定されたことにちなむ展示会です。

東京陸軍少年飛行兵学校の他、久保遺跡の大型地下抗、内山遺跡の探照灯跡、大ヌカリ地区防空壕、三ツ木地区防空壕、陸軍東部 78 部隊、所沢陸軍航空整備学校立川教育隊、村山陸軍病院など戦争遺跡と武蔵村山の空襲被害について展示していました。

関連して、歴史講座「多摩の戦争遺跡－武蔵村山を中心として」が武蔵村山市市民総合センター 3 階で2008年11月15日に開かれ、榑崎茂彌さんが講演しました。

体験教室「戦時中の食事 すいとん」が中藤地区会館で、2008年12月13日に開かれました。

文化財見学会「武蔵村山の戦争遺跡を巡る」が2008年10月25日に開かれ、榑崎由美さんの案内で市内大南地区を歩きました。

Tel:042-560-6620

<http://www.city.musashimurayama.tokyo.jp/shiryokan.html>

横浜市史資料室：神奈川

展示会「横浜の戦争と戦後」が横浜市中央図書館の地下1階ホール前

ホワイエ及び横浜市史資料室で2008年8月15日～9月19日の会期により開かれました。横浜は、1945年5月29日の大空襲で大きな被害を受けましたが、横浜と戦争の関わりは、空襲の被害以外にも、横浜にあった軍事基地、横浜から出征していった兵士、さらに、戦後の占領など、さまざまな観点から見ることができます。

この展示会は、8月15日・「戦没者を追悼し平和を祈念する日」を期して開催したものです。アメリカ国立公文書館の写真資料と「横浜の空襲と戦災資料」関連の現物資料及び写真資料のパネルを展示しました。出陳目録「展示資料一覧」を作成しています。

Tel:045-251-3260 Fax:045-251-7321

<http://www.city.yokohama.jp/me/gyousei/housei/sisi/>

ゆきのした史料館：福井市

「平和文化史料館・ゆきのした」は「ゆきのした史料館」に名称を変更しました。

中野鈴子没後 50 周年記念「中野鈴子展」が2008年11月23・24日に開かれました。中野鈴子は戦前のプロレタリア文学、戦後の民主文学運動の詩人です。鈴子のスクラップブック、鈴子の詩「鋏」の楽譜、直筆原稿、書簡などが展示されました。

Tel & fax: 0776-52-2169

<http://www.yukinoshita.net/>

岐阜市平和資料室：岐阜

特別企画展「反戦を貫いた僧 竹中彰元」が2008年7月19日～9月29日の会期により開かれました。これは、2007年秋真宗大谷派主催の「竹中彰元師 復権顕彰大会」で名誉回復した竹中師を取り上げ、戦時下、戦局が厳しくなる中で時代に迎合せず、信念を通し戦争の犯罪性と愚かしさを主張した師の生涯をひろく市民に知ってもらうために開かれたものです。展示は次の3部構成です。

第1部は、師の出生から2つの大学を卒業し、全国布教師となるなど、エリートコースを歩んだころの活動です。

第2部は、陸軍刑法で有罪判決を受けた師の反戦言動、思想、受けた処罰、またその時代背景です。

第3部は、2007年の復権大会と名誉回復に至った経過です。

解説リーフレットが作成されました。

特別展記念講演会が、「岐阜市平和資料室・友の会」の主催で2008年8月10日に、ハートフルスクエアGの中研修室で開催されました。講師は大東仁さんです。大東さんは真宗大谷派圓光寺住職で、大学卒論で大谷派の戦争協力を研究中に竹中彰元師を知り、掘り起こし研究を深め、世に広げた方です。今回は彰元の人となりや彰元をとりまく人たちについて、話しました。話の概要は次のようです。

1、学問好き、新しいもの好み、裕福ではなかった

幕末に生まれ、明治新時代の激動

の続く1886年に明泉寺住職になりますが、向学心旺盛で経済的には苦勞しながらも大谷派本山の「夏安居」を9年聴講、哲学館（いまの東洋大）、真宗大学（大谷大学）、さらには軍隊・監獄布教のための「教導講習会」などに学び、本山布教師としてエリートコースを進みます。日清・日露戦争時には真宗大谷派や他の僧侶と同様、戦争協力に対する疑問・批判は全くなかったと思われれます。旅順陥落を祝い、「皆万歳と言い 皇城を拝す」という漢詩を書いている事からも伺えます。当時の彰元は反戦僧ではなく、北陸・関西を中心に説教して回っている大谷派のエリート僧でしたが、本来の真宗の僧ではありませんでした。

2、訴えたのは村人ではなく村のお坊さん

1937年9月15日の「戦争は罪悪だ、人類に対する敵である、止めた方が賢明である」と言われた村人は、「もうろくしている」「やつけてやるからな」と「痛罵難詰」しながらも警察に届けずに彰元を守っています。一方10月10日の法要の席での「戦争は罪悪だ、これ以上の戦争は侵略だ」の発言にその場では僧侶たちは何も言わずに穏やかでしたが、その後2人の僧侶が密告して事件になりました。本山や国に忠実で、戦争協力を美德とし任務としていた僧侶たちには、村人とは違い、看過できない問題でした。

3、村人の感覚と国際的視野を合わせ持つ

檀家の息子の出征を心配したことが反戦行動をするきっかけになった

といい、戦争は予算浪費だとか損だとか、普通お坊さんが言わない損得を問題にし普通の村のおじいちゃんレベルで反戦をいう一方、排日・侮日の中国を懲らしめる「聖戦」としているものを「侵略」と言いきり、沢山な彼我（敵も含めて）生命を奪うものと主張する村のおじいちゃんを捨ててしまう国際的視野の持ち主でもありました。

彰元の死の直前の 1945 年 8 月戦争は決着がつかしました。「おじいちゃんの言うとおりになったね」という孫娘に、「うふふ」と笑ったという。一番大事なものは家族だったのでないか。

新興仏教青年同盟委員長を務め治安維持法で逮捕され、戦後知恩院管長や東海高校校長を務めた林霊法さんが 1948 年頃明泉寺を訪ねています。

Tel : 058-268-1050

柳津歴史民俗資料室：岐阜市

展覧会「故郷と戦地をつなぐもの」が 2008 年 7 月 15 日～8 月 31 日の会期により開かれました。故郷の人たちから兵隊さんに送られたお守り、千人針、日の丸寄せ書き、慰問袋、慰問の手紙・葉書、慰問の作文、慰問絵葉書などや、兵隊さんからのお礼状、軍事郵便、召集令状封筒などを展示していました。

Tel:058-270-1080

<http://www.city.gifu.lg.jp/c/40120461/40120461.html>

NPO 法人・松代大本営平和祈念館：長野市

第 4 回「松代大本営平和祈念展」が、2008 年 12 月 6・7 日に松代公民館 2 階の講義室において、松代大本営の保存をすすめる会との共催で開かれました。カンテラ・ロッド火柴箱・軍靴などを展示しました。

Tel & fax: 026-228-8415

<http://homepage3.nifty.com/kibounoie/>

静岡平和資料センター：静岡市

戦争体験を聞くつどいが 2008 年 8 月 17 日にアイセル 21 の 4 階の研修室で開かれ、紙芝居「ともちゃんのおへそ」の上演と 4 人の戦争体験者の話がありました。体験者は木川きよしさんが「兵士として戦地へ」を、下田弘子さんと柳沼静子さんが「静岡市で空襲体験」を、伊藤待子さんが「満州で終戦を迎える」をそれぞれ話しました。

空襲・戦争遺跡フィールドワークが 2008 年 8 月 28 日におこなわれました。

静岡市民が遺した戦争資料展(第 2 部)「戦地へ送られた静岡市民たち」が 2008 年 12 月 5 日～2009 年 5 月 31 日の会期で開催されています。戦地へ送られた静岡市民の遺書、遺品、戦地からの手紙、写真などを展示しています。

Tel : 054-247-9641 Fax : 054-247-9641

<http://homepage2.nifty.com/shizuoka-heiwa/>

沼津市明治史料館：静岡

2008年8月7、9、10日に、「平和を考える戦争史跡めぐり」をおこないました。市内に残る戦争遺跡をバスでめぐり、風化しつつある戦争を思い起こし、平和の尊さを考えました。9日には東京都立沼津戦時疎開学園の同窓会の方がたが疎開学園跡で疎開当時の生活の様子を話しました。

2008年8月6日に、小学生が参加して、「戦時中の暮らしを体験しよう」が開催され、佐藤友哉さんが紙芝居「白旗の少女」を交えて、戦時中の話をしました。すいとん作りをして、戦時中の苦労の一こまを体験しました。

Tel:055-923-3335 Fax:055-925-3018

<http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/sisetu/meiji/index.htm>

桜ヶ丘ミュージアム：愛知・豊川市

「豊川海軍工廠展－絵画・写真資料を中心に」が2008年7月19日から8月31日の会期で開催されました。豊川海軍工廠展は1995年から毎年開催されています。2008年は豊川海軍工廠の歴史や1945年8月7日の豊川海軍工廠への空襲を伝えるいつもの展示とともに、絵画や写真資料を特に展示しました。絵はほとんどが、豊川海軍工廠に勤めていた方が空襲を描いたものでした。アメリカ軍による空襲前と空襲後の航空写真も展示されました。

Tel:0533-85-3775 Fax:0533-85-

3776

<http://www.city.toyokawa.lg.jp/tauto/bunka/museum.html>

栗東歴史民俗博物館：滋賀

テーマ展「治田村国防婦人会の記録－平和のいしずえ 2008」が2008年7月19日～8月24日の会期により開催されました。栗東歴史民俗博物館では、栗東市の「心をつなぐふるさと」平和都市宣言をうけて、1990年度から、戦争と平和をテーマに、地域資料から人びとの暮らしと戦争の関わりを考える「平和のいしずえ」展を毎年開催してきました。

2008年は、日本における近代以降の戦争についての通史展示とともに、2007年度に博物館に収蔵された国防婦人会治田村分会にかかわる資料群を特集し、栗東での女性と戦争とのかかわりについて展観しました。展示構成は、1. 近代兵制の確立－西南戦争から日清・日露戦争 2. アジア・太平洋戦争下の栗東 3. 治田村国防婦人会の記録－女性と戦争 です。

国防婦人会治田村分会が組織されたのは、1937年3月4日のことです。この日おこなわれた発会式には、治田村の11字から529名の会員が集っています。国防婦人会治田村分会が組織されるきっかけとなったのは、陸軍京都分隊区司令部から竹下中将を招いて治田村で開催された、国防婦人会をテーマとした講演会でした。この講演会を期に、治田村主婦会が中心となって国防婦人会分会

の組織づくりが進められたのです。当時、満州事変をめぐる混乱から、日本はすでに国際連盟を脱退し、日中戦争の勃発が間近に迫っていました。このような緊迫した世相の中、治田村の女性たちは国防婦人会分会の組織を決意したのでしょう。

田村分会の資料とともに、立命館大学国際平和ミュージアム所蔵の京都市室町分会の資料から、国防婦人会の規則、書類整備要項、分会会則なども展示していました。

国防婦人会以外の、日清・日露戦争、アジア・太平洋戦争の資料も展示しました。松岡米蔵さんの遺品や、学童疎開、出征、戦死、金属回収、貯蓄、代用品、空襲・防空などの関係資料も展示していました。展示図録と出品目録を刊行しています。

関連して、名古屋市見晴台の高射砲陣地跡の戦争遺跡見学会が 2008 年 7 月 29 日に開かれました。名古屋市見晴台考古資料館学芸員の伊藤厚史さんと、高射砲陣地の元隊員の池田陸介さんが案内しました。

Tel:077-554-2733 fax 077-554-2755

<http://www2.city.ritto.shiga.jp/hakubutsukan>

浅井歴史民俗資料館：滋賀・長浜市

企画展「第 6 回終戦記念展 赤紙が届いた人々―兵事資料から見えた真実」が郷土学習館 1 階展示室で 2008 年 7 月 24 日～9 月 7 日の会期により開催されました。2008 年の終戦記念展は、2007 年に展示した

大郷村役場の兵事資料に出てくる軍人だった方やその遺族の方を 1 年かけて駆け回って取材し、収集した資料や体験話を紹介し、軍隊に入った村人たちの運命と当時の兵士動員システムを明らかにするものでした。

展示では大郷村兵事資料とともに、軍人や遺族の方から提供された資料が提供者の話とともに展示されました。主なものは、軍人では、河瀬勇さんの日誌・戦場からのハガキ・手紙と押し花、粕渕辰次さんの出征時の千人針・日の丸寄せ書き・認識票・米原駅空襲時のアメリカ軍の銃弾、ダムダム弾、西邑孝太郎さんのネットの付いた鉄帽・国民服・軍服のズボン・水筒・手紙・ハガキ・身分証明書・引揚証明書・電報、室庄衛さんの海軍での写真、などがありました。

遺族では、光明和香子さんの夫の泰寛さんの手紙・家族受診券・綿花入れ・引越荷物明細書・印鑑、西尾保男さんのお兄さんの與三郎さんの消息判明通知書・陰膳に置かれた與三郎さんの写真、木村諄子さんのお兄さん脩さんの位牌・死亡告知書・戦地からのハガキ、赤井昭さんのお兄さんの広雄さんの原爆で焼け溶けた軍刀、原爆で溶けたお金、ハガキ・通知・死亡告知書・死亡証明書・死亡報告書、中川信孝さん提供の中川重信さんの死亡電報・軍隊手帳などがありました。

関連して、講演会「今だからこそ伝えたい戦争の記憶」が資料館の七りん館で 2008 年 8 月 24 日に開かれ、西邑孝太郎さんと西邑紘さんが講演しました。

Tel:0749-74-0101

<http://www.city.nagahama.shiga.jp/index/000012/002487.html>

近江八幡市立資料館：滋賀

テーマ展「平和への祈り」③が旧伴家住宅で、2008年7月12日～8月17日の会期により開催されました。肉弾三勇士など兵士の書簡、日誌、軍隊手帳、入営記録、応召記録、軍隊日誌、学徒動員の写真、絵本、週刊少国民、衣料切符、防空頭巾、灯火管制カバー、黒色電球、軍装品などを展示しました。戦争中の体験談と出品目録を掲載した解説資料を刊行しています。

Tel:0748-32-7048 Fax:0748-32-7051

http://www.city.omihachiman.shiga.jp/contents_detail.php?co=kak&frmId=823

野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館）：滋賀

夏期テーマ展「環境問題への取り組みーわたしたちができること」が1階エントランスホールで2008年7月19日～8月31日の会期により開催されました。環境破壊や地球温暖化が問題になっているなか、野洲市が事業者や市民と協働しておこなう「野洲市環境基本計画」のプロジェクトの取り組みをパネルなどで紹介したものです。

Tel:077-587-4410 Fax:077-587-4413

<http://www.city.yasu.lg.jp/doc/k>

youikubu/hakubutukan/20071219c.html

立命館大学国際平和ミュージアム：京都市

特別展「世界報道写真展 2008」が2008年10月1日～19日に立命館大学びわこ・くさつキャンパスで、10月21日～11月16日に国際平和ミュージアムで、11月19日～30日に立命館アジア太平洋大学で、それぞれ開催されました。世界報道写真展は、1955年にオランダで設立された世界報道写真財団が毎年開催している「世界報道写真コンテスト」の入賞作品（約200点）を集め、世界100か所以上を巡回する展覧会で2008年で51回目を迎えます。立命館大学では、1995年から毎年開催しています。

関連して、2008年10月28日にはびわこ・くさつキャンパスのコーニングハウスⅠの301で、フォトジャーナリスト中村梧郎さんの講演「戦争と写真ー“枯葉作戦”から見えるもの」が、10月29日は衣笠キャンパスの以学館1号ホールで中村梧郎さんと国際平和ミュージアム名誉館長の安齋育郎さんの対談「今も続く枯葉剤の悲劇ーアメリカはどう対応したか」が、それぞれ開かれました。

特別展「昭和20年の中学生」展が中野記念ホールで2008年11月21日～12月21日の会期により開かれました。2008年は国家総動員法制定から70周年です。第二次世界大戦末期には、総力戦として国の全

精力が戦争に注がれ、現在の中学生や高校生に当たる世代は国民学校高等科、高等女学校、中学校、青年学校などさまざまな学校に通いながら、戦争を正当化し、協力するような教育を受けていました。また、軍需工場での労働や建物疎開に動員されました。国家総動員体制のもと、学ぶことを奪われ、生産現場などに動員された子どもたちにとってその作業や生活は過酷な経験でした。銃後は、これら勤労働員学徒たちによっても支えられていたのです。ひたすら労働に奉仕した結果、空襲や天災、事故などで短い生涯を終えた子どもたちも数多く存在します。

この特別展では、今の私たちの生活と比較し、平和について考える機会にするために、特に十代前半から半ばの子ども達の体験に焦点を当て、当時の中学生がたどった足取りを追っています。展示資料は学校の教科書や備品など当時の学校の様子を伝える資料と、その中で生きた子どもたち一人ひとりの様子を伝える資料約 200 点です。図録を刊行しています。

関連して、当時、中学生だった方が当時をふりかえり体験を話す会が 2008 年 12 月 6 日、13 日、20 日に開かれました。

第 37 回ミニ企画展示「資料と写真でみる浮島丸訴訟－遺骨問題の新たな展開に向けて」がミニ企画展示室で、2008 年 7 月 8 日～26 日の会期により開催されました。戦争終結直後の 1945 年 8 月 24 日、京都府の舞鶴湾で海軍輸送艦・浮島丸が、爆発沈没しました。乗船者の大多数は

帰国のために乗船していた韓国人でした。この事件は後に、「浮島丸事件」と言われます。その後、日本政府は日本人乗組員の死傷者には補償しましたが、韓国人には補償をしませんでした。そのため、遺族たちは、父親がどのように亡くなったのか分からないまま、長い年月を生きてきましたが 1992 年になり、浮島丸事件で死亡したことが分かり、日本政府に公式陳謝と賠償を求めて裁判を起こしました。このミニ企画展示では、この浮島丸事件に関する日本の戦後責任の経緯について、裁判で明らかになった事件の概要や、遺骨返還の新たな動きについて展示をしました。

第 38 回ミニ企画展示「国民学校って知っていますか？」がミニ企画展示室で、2008 年 8 月 3 日～30 日の会期により開催されました。1941 年に国民学校令が公布され、それまでの小学校は国民学校に変わりました。道徳教育および国民教育の基礎と生活に必要な知識を身につける小学校から、国民の基礎的練成をする国民学校に変わったのです。この展示では、衣服、遊び道具、教科書、絵、夏休みの宿題など、当時の生活に深くかかわりがある資料を通してその様子を紹介しました。

第 39 回ミニ企画展示「フィリピン写真展 THE LIVES08－ごみ山・スラムの日常」がミニ企画展示室で 2008 年 9 月 10 日～28 日の会期により開催されました。立命館大学国際 N G O サークル Rits BLOH(SALT Project) が日本の N G O 団体「SALT」の主催するスタディツアー

に参加し、「ごみを拾って生活する」という日本では考えられない光景を目の当たりにし、学生たちが実際に現地で撮影した、ごみ山の様子や現地の人びとの日常の写真を展示するとともに、SALT チームの活動の内容も紹介しました。

第40回ミニ企画展示「立命館各付属校 平和教育実践展示」がミニ企画展示室で、2008年10月19日～12月5日の会期により開催されています。初等・中等教育段階での平和・人権教育の実践内容を紹介することを通じて、今日の小学生、中学生や高校生の平和・人権課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を、展示物を通じて知ってもらおうとするものです。

Tel: 075-465-8151 Fax: 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp>

舞鶴引揚記念館：京都

特定非営利活動法人「舞鶴・引揚語りの会」の企画制作による、2008年度第2回企画展「引揚事業と舞鶴市及び市民の奉仕活動」が企画展示室で8月1日～10月30日の会期により開催されました。舞鶴港は、引揚港として、1945年10月7日第一船(雲仙丸)の入港から1958年9月7日の最終船(白山丸)の入港までの13年間にわたり「引揚のまち・舞鶴」として大きな歴史的使命を果たしました。舞鶴市民がどのように支援活動をしたかに視点をあてた展示会でした。その活動は引揚者のみならず、待ちわびる家族や関係者にと

って大きな支えとなりました。当時の舞鶴市長から市民への協力要請文書、新聞記事、写真などを展示しました。

Tel:0773-68-0836 Fax:0773-68-0370

<http://www.maizuru-bunkajigyoudan.or.jp>

向日市文化資料館：京都

玄関ホールでの夏のミニ展示「'08 暮らしのなかの戦争展 学校と戦争」が2008年7月19日～8月31日の会期により開催されました。文化資料館は、毎年夏に市民の方から提供された資料をもとに、戦時下の暮らしに関する展示をおこなっています。2008年の展示では、戦時下の学校に関する資料を紹介していました。厳しい状況のなかで、奮闘された先人の足跡をたどることで、現代に生きる私たちが、あらためて平和について考えるきっかけとするために、開かれたものです。

化学兵器を掲載した「青年学校総合教科書」、満州国や植民地の朝鮮・台湾を紹介している「総合青年学校教科書」、「青年学校教練教科書」など青年学校の資料や、奉安殿・勤労奉仕などの小学校絵はがき、少国民に関する本などを展示していました。青年学校での教育が軍隊の予備訓練となり、小学校も国民学校と改称され、「皇国民の錬成」を目的とする学校に変化したことを示していました。資料リストと解説を載せたリーフレットを刊行しています。

Tel:075-931-1182 Fax:075-931-

1121

<http://www.city.muko.kyoto.jp/shisetsu/shiryokan.html>

大山崎町歴史資料館：京都

小企画展「平和のいしずえ展 近代の大山崎の学校」が 2008 年 8 月 12～24 日の会期により開催されました。「平和のいしずえ展」は毎年夏に、戦争前後の資料を展示し、資料から平和の尊さを語り合う契機にするために開催されているものです。

2008 年は「近代の大山崎の学校」という視点で、教育現場の変遷を考えるものでした。主な展示品は、真珠湾海軍特別攻撃隊・軍神の授業、運動場背後の忠魂碑と奉安殿、剣道、体錬などの写真と、アメリカ、オハイオ州アライアンスの小学校とエルスワーススクールから送られたアルバム、1942 年 3 月の修了記念写真アルバム、1929 年・1930 年・1931 年・1940 年のアルバム、戦後のアルバム、1893 年からの学校沿革関係公文書、女学校すごろく、日の丸寄せ書き、陸海軍の活躍・スパイ対策などが描かれているカルタなどです。

Tel : 075-952-6288

<http://www.kiis.or.jp/rekishiki/kyoto/yamazaki2.html>

大阪国際平和センター(ピースおおさか)：大阪市

特別展「核の恐怖ーヒロシマ・ナガサキの原爆被害」が 1 階特別展示室で 2008 年 9 月 25 日～12 月 27 日

の会期で開催されました。1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、人類史上初めて原子爆弾が広島に投下され、更に 3 日後の 8 月 9 日午前 11 時 2 分には、2 発目の原子爆弾が長崎に投下されました。市街地は廃墟と化し、多くの人びとの命が奪われました。かろうじて生き残った人びとも、心と体に大きな痛手を受け、63 年後の今日も被爆された方がたの多くが、後遺症などに苦しんでいます。10 月 24 日～30 日は「国連軍縮週間」ですが、核を巡る世界情勢を見ると、インドやパキスタンのように核を保有する国が増えるなど、人類は依然として核の恐怖にさらされています。

今回の特別展では、写真パネルとピースおおさか所蔵の被爆資料を展示し、原爆被害の実態を再確認するとともに、核兵器の廃絶と世界の恒久平和の実現に向けて、私たちは何をすべきか、何をしなければならないのかを考える機会とするものです。展示内容は、広島・長崎の原爆被害の実相や現在の核兵器の状況などについて、分かりやすく説明した写真パネル 30 点、「溶けた窓ガラス」・「熱線を浴びた瓦」などの被爆資料約 30 点、爆撃機 B29 模型、原爆ドーム模型、広島原爆体験画（複製）などです。

これは、日本平和博物館会議（構成団体：広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、沖縄県平和祈念資料館、大阪国際平和センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ、立命館大学国際平和ミュージアム、埼玉県平和資料館、川崎市平和館）の協力に

より開かれたものです。

「8.15 終戦の日 平和祈念事業」として、1日目の2008年8月9日には、「アコースティックギター・コンサート“平和を紡ぐ人”ー平和・しあわせ・いのち」が1階の講堂で開かれました。演奏は『ちめいど』のみなさんで、司会はもず唱平さんが務めました。曲目は、「平和を紡ぐ人」や「戦争を知らない子供たち」などでした。2日目の8月10日には大阪戦災傷害者・遺族の会会長の伊賀孝子さんの講演会「私の戦争体験と平和への願いー大阪空襲死没者名簿づくりに込めた想い」が1階の講堂で開かれました。

「12・8開戦の日 平和祈念事業」の「成世昌平&もず唱平 歌で検証する戦争と平和」が2008年12月6日に1階の講堂で開かれました。これは12月8日の太平洋戦争開戦の日を迎えるにあたり、平和祈念事業として開催したものです。歌手の成世昌平さん、作詞家のもず唱平さん他を迎え、戦時下の反戦歌や厭戦歌、さらに南方戦線で亡くなった父親や家族への思いをつづった新曲「昭和の家族」などを披露・解説してもらいながら、戦争の悲惨さと平和の尊さについて考える機会とするものでした。【第1部】次世代が歌う平和のテーマでは、高橋樺子（歌手）と鈴木潔（シンガーソングライター）が「リリーマルレーン」「ヘイ・ジュード」「もずが枯れ木で」などを歌いました。【第2部】実年世代からの証言&成世昌平の平和（なごやか）な歌声では、もず唱平さんが新曲「昭和の家族」作詞

者・吉村康さんへのインタビューをしました。「昭和の家族」の作曲者、船村徹さんの声の出演もありました。歌のステージで、成世昌平さんから新曲「昭和の家族」までを歌いました。

フィールドワーク「堺空襲の被災あとを歩く」が郷土史家の網信二さんを講師として2008年11月23日に開かれました。1945年、大阪は度重なる空襲により焼け野原となり、同年7月10日未明ついに堺も大規模な空襲にみまわれました。街は炎につつまれ多くの家屋が焼かれ死者1860名、罹災者約7万人の被害をだしました。今回、堺市のなかで被害の大きかった地域を歩き、空襲時の様子や被害について知る機会として、開催されるものです。

ピースおおさか「ウィークエンド・シネマ」が1階の講堂で開かれています。これは、ピースおおさかで所蔵する戦争や平和の映像資料を広く多くの方がたが鑑賞する機会として、また、平和な世の中を子どもたちに引き継いでいく方法をいっしょに考えるために、開催するものです。

7月5日、6日、12日、13日は、アニメの「はだしのゲン」が上映されました。これは、原爆で焦土となった広島の悲惨な状況の中で、たくましく生きる少年と、その家族を描いたものです。

7月19日、20日、26日、27日は、アニメの「はだしのゲン2」が上映されました。

8月2日、3日は、「白い町ヒロ

シマ」が上映されました。これは、学童疎開中にヒロシマの原爆で、母と姉・弟を失った木村靖子さんの物語です。

8月16日、17日は、「からかささんしん」が上映されました。これは、沖縄の歴史を沖縄の伝統的な楽器「からかささんしん」にのせて描いています。

8月23日、24日は、「あした元気になーれー半分のさつまいも」が上映されました。これは、海老名香葉子さんの原作をアニメにしたものです。

8月30日、31日は「紙屋悦子の青春」が上映されました。これは、特攻基地のあった鹿児島県出水市を舞台に、1945年の庶民生活を描いた戯曲をもとにしたものです。

9月7日、13日、14日は、「ヤカオランの春ーあるアフガン家族の肖像」が上映されました。これは、戦争と難民が日常化してしまったアフガニスタンの過去を見つめ、その悲劇をくりかえさないために作られたドキュメンタリーです。

10月4日、5日、11日、12日は、野坂昭如の「戦争童話集（2）忘れてはイケナイ物語り」を上映しました。

10月18日、19日、25日、26日は「地球交響曲 ガイアシンフォニー第4番」が上映されました。これはガイア（地球）上の全ての存在はつながっていることを、音楽・映像・証言で明らかにするもので、シリーズ第4作は、「ガイア理論」の創始者ジェームズ・ラブロック（イギリス）や沖縄の自然の中で育った

版画家、名嘉睦稔など4編のオムニバスです。

11月1日、2日、8日、9日は「地球交響曲 ガイアシンフォニー第5番」が上映されました。シリーズ第5作は、前4作が順調に成長し、21世紀初頭の陣痛の苦しみを経て新しく生まれ変わりつつあるさまを描いています。

11月15日、16日、22日、23日、29日、30日は、「樺太 1945年夏 氷雪の門」が上映されました。これは1945年8月ソ連軍は北海道北方の島、樺太の南部に侵攻しましたが、その地で8月15日以降も死に至るまで真岡郵便局にとどまり電話交換手の仕事を続けた乙女たちの実話です。

Tel:06-6947-7208 Fax:06-6943-6080

<http://www.peace-osaka.or.jp/>

大阪人権博物館(リバティおおさか)：大阪市

収蔵資料展「戦争と国民総動員」が2008年7月1日～9月28日の会期で開催されました。1930年代に中国との戦争をはじめた日本は、その後、アジア・太平洋地域に戦域を拡大させました。戦争が長期化するにつれ、政府は国力のすべてを戦争に注ぎ込む総力戦体制をとりました。国家総動員法、国民徴用令をだすことによって、政府は戦争遂行のために国民や資本、資源を直接管理・統制できるようにしました。さらに大政翼賛会が結成され、国民一人ひとりが国家的に組み込まれました。

「銃後の守り」という呼び名で、人びとは戦争へと動員されていきました。

その一方で、被差別民衆や女性、障害者は、「国民一体」のかけ声のもと、戦争に協力することで社会的な地位を向上させようとする動きもありました。子どもは「少国民」と呼ばれ、将来の兵士、その兵士を生み育てる母親になるように教育されました。軍需産業を振興させるために終身雇用制度などの労働者保障もできました。

本展は、当館所蔵の戦争関係のポスターや資料から、戦時下の「国民総動員」のかけ声のもとでの人びとの生活や権利を考えようとするものでした。

関連して、「子どものための夏休みビデオ上映会&展示説明会」が2008年8月2日に開かれ、ビデオは「ぞう列車がやってきた」が上映されました。「ぞう列車がやってきた」のあらすじは次のようです。

1937年12月、愛知県名古屋市の東山動物園に木下サーカスから4頭のぞうがやってきました。ぞうたちは、たちまち動物園の人気者になりました。しかし、その頃の日本は中国と戦争をしていました。戦争は長引き、やがて日本はアメリカやイギリスとも戦争をはじめました。動物園では動物たちのエサが少なくなり、ぞうが食べるワラも燃料として集められてしまいます。さらに、動物園は政府から「猛獣を処分せよ」と命令をうけます。空襲などオリが壊れて、トラやライオン、ぞうといった動物たちが外に出ると危険だという

理由からでした。全国の動物園でたくさん動物が殺されました。上野動物園のぞうのトンキー、花子、ジョンも殺されてしまいました。東山動物園でも、食料不足などで2頭のぞうが死んでしまいました。トラやライオンも殺されてしまいました。しかし、飼育員さんたちが一生懸命ぞうたちを守ったので、2頭のぞうが生き残りました。1945年8月15日、長かった戦争が終わりました。生き残ったぞうを一目みたいという子どもたちの願いが大人のこころを動かし、「そう列車」が全国から東山動物園に向けて走りました。

第62回特別展「アジア・大阪交流史一人とモノがつながる街」が2008年10月15日～12月21日の会期で開催されました。大阪は古代、中世から、難波津や堺などの港を玄関口に、中国・朝鮮・琉球、「蝦夷地」などの国や地域、人びとと交流し、相互に影響を与えながら歴史と文化を育んできました。近世においても、経済都市として海路によって日本各地と結びつくと同時に、文化や思想、教育の分野でも新しい流れをつくりだしました。豊臣政権の文禄・慶長の役により、国交が断絶していた朝鮮からの通信使は近世になって再開されました。江戸参府の途中、瀬戸内海を通り大阪で下船し、川船に乗り換えて淀川を上る琉球使節、朝鮮通信使の行列を、大阪の人びとは心待ちにし、歓迎しました。

近代になると、紡績をはじめとする世界の新しい技術を積極的に受け入れた大阪は「東洋のマンチェスター」と呼ばれる日本一の工業都市と

して発展しました。大阪と朝鮮、沖縄を結ぶ定期航路が開かれたこともあり、朝鮮、沖縄から多くの人びとが仕事を求めて海を越えました。大阪に移動、移住した人びとは、差別を受けながらも大阪の地に生活の場を築いていきました。

本展では、「アジアの玄関口」であった古代から現代にいたる大阪の歴史を資料によってたどります。そして、21世紀をむかえた今、大阪に生きる人びとが築いた歴史・文化から「アジアのなかの大阪」を再発見し、大阪の未来を考えようとするものです。展示構成は、大阪の渡来文化、朝鮮・琉球からの使節、東洋のマンチェスターと海を越えた人びと、大阪のなかの多文化、です。図録が刊行されました。

関連して記念講演会「アジアのなかの大阪～東アジアと難波津」が2008年11月30日に開かれ、京都大学名誉教授で大阪府立中央図書館名誉館長の上田正昭さんが講演しました。

Tel : 06-6561-5891 Fax : 06-6561-5995

<http://www.liberty.or.jp/>

堺市立平和と人権資料館：大阪

企画展「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真ポスター展」が2008年7月2日～9月28日の会期で開催されました。今回の企画展は、広島・長崎の原爆被害の写真ポスターを通して核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さ・平和の尊さ・いのちの大切さを訴えるものです。

企画展「アイヌ民族の暮らしと人権」が2008年10月1日～12月28日の会期で開催されました。これは、アイヌの人びとの暮らしや文化、差別の実状をパネルで紹介し、お互いに理解し、認め合い、尊重しあう社会を作っていくことの大切さを訴えるものです。

Tel:072-270-8150 Fax:072-270-8159

http://www.city.sakai.osaka.jp/city/info/_jinken/

吹田市平和祈念資料室：大阪

企画展「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真パネル展」が2008年8月19日～31日の会期で開催されました。

Tel : 06-6387-2593

<http://www.city.suita.osaka.jp/kobo/jinken/page/000338.shtml>

大阪歴史博物館：大阪市

特集展示「90周年記念 大阪の米騒動と方面委員の誕生」が2008年7月9日～8月25日の会期により開催されました。2008年は、1918年に米騒動が全国的に発生してちょうど90年になります。米騒動、その直後に大阪で創設された方面委員制度、大阪市の社会事業などに関する資料を紹介しながら、米騒動が大阪に与えた衝撃の大きさを解明するものでした。米騒動で襲撃を受けた薪炭商の記録なども展示してあります。図録を刊行しています。

TEL:06-6946-5728 FAX:06-6946-2662

<http://www.museum.city.osaka.jp/>

姫路市平和資料館：兵庫

「非核平和展」が2階展示室で2008年7月17日～8月31日の会期により開催されました。姫路市では、1985年3月6日の「非核平和都市宣言」以来、その趣旨を広く市民にアピールするとともに、非核平和について考える機会を提供するため、1986年度から「非核平和展」を毎年開催、今年で23回目になります。

主な展示資料は、被爆資料の展示（広島平和記念資料館より借用）22点、被爆写真などのパネル（広島平和記念資料館、長崎原爆資料館より借用）38点、姫路市児童・生徒による平和への思いを描いたポスター・書道作品198点、県立姫路工業高校デザイン科生徒によるイラストレーションなどの展示15点、です。

関連して、姫路市児童合唱団と姫路市児童合唱団ジュニアによる「平和を共に歌う合唱コンサート」が2008年8月3日に開かれました。

「被爆体験談を聞く会」が8月9日に開かれ、姫路市原爆被害者の会会長の新田勇さんが話しました。

秋季企画展「戦地からの手紙―妻を想い子を想う」が2階展示室で2008年10月4日～12月23日の会期により開かれました。比企伝作さんが妻と子に宛てた90通の書簡が展示の中心です。比企さんは軍隊に入り、「満州」にいましたが、1944年に沖縄に移り、沖縄戦で戦死して

います。書簡は「満州」から出されたもので、ほとんど家族のことについて書かれています。沖縄に移る時に遺書を書き、家族宛に送っています。

書簡以外に、比企さんの遺品・死亡告知書とともに、軍服、飯盒、鉄兜など約60点と写真・地図パネル約30点も展示しています。この展示を通じて家族にとっての戦争とは何かを見つめ、平和の尊さを感じてもらおう趣旨で開催されたものです。

関連して、「姫路空襲を聞く会」が2008年11月3日に開かれ、黒田権大さんが話しました。

Tel:0792-91-2525 Fax:0792-91-2526

<http://www.city.himeji.hyogo.jp/heiwasiryo/>

奈良県立図書情報館：奈良市

戦争体験文庫企画展示「子どもたちが見た満州 1 満州修学旅行」が2008年10月1日～12月27日の会期により開かれています。かつて日本人は中国東北部を「満州」と呼び、その地に特別なまなざしを向けていました。日本は開国以来、ロシアの侵攻を防ぎ、日本本土の防備を固めるために、朝鮮半島と満州を勢力下におさめることを目指しました。そして日清・日露戦争の後、朝鮮を併合し、ロシアから遼東半島南端部（旅順・大連地域）の租借権と鉄道の一部を得ました。この時、満州開発を担う組織として設立されたのが、南満州鉄道株式会社（通称満鉄）で

す。

これ以後、満州は日本の資源庫として、また余剰人口のはけ口としての役割を期待され、国防的な意味もあいまって、「日本の生命線」と呼ばれるようになりました。1929年に世界恐慌が起こると、そうした意識はさらに拡大し、1931年陸軍は満州事変を起こします。そして翌年、清朝最後の皇帝溥儀を執政に立て、「満州国」を建設。国防・政治の実権を握り、日本の大陸進出の基地として満州を開発していきました。終戦時には155万人の日本人が満州にいたとされています。

今回のシリーズ展示「子どもたちが見た満州」では、この満州という地を当時の子どもたちがどのように見ていたのか、また経験したのかを紹介しします。第1回目の本展示では、修学旅行の訪問先としての満州を紹介しています。

主な展示資料は、修学旅行行程表、満鮮修学旅行の葉、大阪府女子師範学校修学旅行アルバム（その1）（その2）、満州帝国国歌歌詞、満鉄一覧、南満州鉄道株式会社カレンダー、満州旅行案内、旅大観光案内図、日本満州見学地理、『講談社の絵本 広瀬中佐』、『掌中満洲国全図』、『すぐに役立つ支那及満洲語の手引き』、『満洲旅行の葉』、『子供の満洲』などです。

Tel:0742-34-2111 Fax:0742-34-2777

<http://www.library.pref.nara.jp/sentai/gallery.html>

広島平和記念資料館：広島市

2008年度第1回企画展「被爆建造物は語る」が東館地下1階展示室（5）で2008年7月24日～12月15日の会期により開催されました。展示構成は、はじめに、空から見たヒロシマ、ヒロシマ壊滅／爆心に生き残る／命の架け橋、よみがえる－1、よみがえる－2／木造建物の今、生まれ変わる、新たな活躍に向けて、世界共通の遺産、おわりに、です。
Tel:082-241-4004 Fax:082-542-7941

<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/>

福山市人権平和資料館：広島

企画展「福山の戦争遺跡（Ⅱ）－石碑は語る 命の尊さ」が2008年7月8日～8月31日の会期により開催されました。戦争の記憶が風化し、伝承が困難になっている今日、戦争遺跡を掘り起こし、平和への教訓として生かすことが重要になっています。今回は、「福山の戦争遺跡（2003年）」に続き、その後、合併した地域の資料を加えたもので、平和の大切さを訴える趣旨で開かれました。

企画展「アイヌ民族の歴史と文化」が2008年9月17日～11月14日の会期により開催されました。日本の先住民族であるアイヌ民族の歴史と文化、そして現在の状況を正しく知り、アイヌ民族への理解を深めるとともに、人間相互の主体性と文化を、尊重し共有する意義について考える趣旨で開かれました。

Tel:084-924-6789 Fax:084-924-6850

<http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/jinkenheiwashiryokan/>

広島県立美術館：広島市

「戦争と美術」展が 2008 年 7 月 8 日～10 月 5 日の会期により開催されました。次の 3 つの視点で展示していました。

1. 「戦時期の美術作品」では、川口軌外、山路商、今西中通、土屋幸夫、桂ゆきの「前衛的作品」、井上長三郎、あい光、松本竣介、寺田政明の「不安な時代を感じさせる作品」、南薫造、岡田謙三の「中国の風景を描いた作品」が展示されました。

2. 「疎開と美術作品」では南薫造、小林徳三郎、小早川篤四郎らの疎開した作家の作品を展示していましたが、多くは戦後に描かれたものです。

3. 戦後の作品から見る「戦争と美術」では、名井万亀の「第五福竜丸」、平野清の「原爆ドーム」をはじめ、菅井汲、宮崎進、金光松美の作品も展示されました。

Tel:082-221-6246 Fax:082-223-1444

<http://www1.hpam-unet.ocn.ne.jp/>

高松市市民文化センター平和記念室：香川

平和記念室企画展「平和学習のためにー沖縄戦と高松空襲を語り継ぐー建物を中心に」が高松市市民文化

センター 1 階ロビーで 2008 年 8 月 23 日～9 月 7 日の会期により開催されました。

平和記念室の収蔵品コーナーでは、2008 年 10 月 1 日～2009 年 1 月 31 日の会期で「将校と兵」の特集展示をしています。

平和記念室収蔵品巡回展が牟礼町の牟礼公民館で 2008 年 11 月 1 日と 2 日に開かれました。牟礼地区の市民から寄贈されている戦争遺品を中心に展示しました。

教職員のための平和教育講演会が高松市市民文化センター 3 階の第 1 集会室で 2008 年 8 月 26 日に開かれました。「高松市戦争体験を語り継ぐ語り部の会」の岡田昌子さんが「高松空襲を伝えるーフィールドワークを通して」を、前平和記念室のセンター学習担当の岡崎博行さんが「平和教育推進のための教師の役割について」を、それぞれ講演しました。

Tel : 087-833-7722 Fax : 087-861-7724

<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/1794.html>

愛媛県歴史文化博物館：西予市

2008 年度特別展「愛媛と戦争ー伝えたい戦争の記憶・平和な未来へ」が 2008 年 7 月 9 日～9 月 7 日の会期により開催されました。戦後 60 年以上が過ぎ、戦争体験者から、当時の様子を直接聞き取る時間は、しだいに少なくなろうとしています。戦争体験者と戦後世代が、残された時間をどのように過ごすかは、両者

にとって大きな課題となっています。今日、平和を享受している日本は、アジア諸国へ与えた損害と苦痛を認識し、戦陣に散り、戦禍に倒れた多大な国民の上に成り立っていることを忘れてはなりません。今日もなお戦争に関連して残された課題は少なくありません。国家という大局的な視点から戦争を捉えることの重要性は言うまでもありませんが、個人や地域といった身近な視点から戦争を捉えることも重要です。

今回の展示は、近代に起こったさまざまな戦争を対象とし、敗戦に至る過程を紹介しています。特に、愛媛に関係の深い歩兵第22連隊に関する資料を中心に、生死の狭間に置かれた兵士と、厳しい統制下に置かれた銃後の人びとの両面を捉えようとしています。当時の姿を直視することは、決して過去の戦争を肯定し、賛美するものではなく、むしろ、今日と比較することで、平和を考える糸口になるものです。この企画展を通じ、戦争体験者から子どもまで、幅広い世代が戦争と今日享受している平和について考える機会にすることが趣旨でした。

主な展示資料は、招魂祭祭文、南京落城新聞切抜（絹製）、出征兵士軍事郵便・遺書、戦死通知書、血染めのチョッキ、教育勅語、教科書、国民学校の通知表、双六、国債ポスター、絵はがき、志願兵徴募ポスター、婦人標準服、戦時債券、焼夷弾の殻、防空カバー、灯火管制電球、アメリカ軍の伝単、空襲の写真、砲台・監視所・掩体壕・忠魂碑の写真、『宇和島の空襲』などです。図録を

刊行しています。

関連して講座が開かれ、7月19日には、学芸員の平井誠さんが「『「愛媛と戦争」展のみどころ」を、7月26日には宇和島空襲を記録する会代表の水野政子さんが「宇和島空襲を伝える」を、8月9日には平井誠さんが「沖縄戦における22連隊の軌跡」を、それぞれ話しました。

Tel:0894-62-6222

<http://www.e-rekihaku.jp/>

松山市立子規記念博物館：愛媛

第54回特別企画展「反骨のジャーナリスト－陸羯南・宮武外骨・黒岩涙香」が2008年7月19日～8月17日の会期により開催されました。

Tel:089-931-5566

<http://www.city.matsuyama.ehime.jp/sikihaku/>

ドイツ館(Hinweise für Besucher)：徳島・鳴門市

『「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究 第6号』が出ました。1冊500円で販売しています。

7篇の論文より構成…校條氏は名古屋収容所の所外労働、井上氏はヘルマン・ボーネル氏について、奥村氏は山形大学に残されている青島鹵獲書籍、瀬戸氏は集合写真をとおして日本人とドイツ人俘虜のふれあい、田村氏は丸亀：石井弥四郎所長・福岡：江口鎮白所長・静岡：嘉悦敏所長についての情報、大阪俘虜収容所についての小論の2篇、堀田氏は

「大阪俘虜収容所の研究」出版経緯とその内容を紹介しています。

ドイツのトリアー市独日協会から19名の方が来館。国際交流員パトリック・ワーグナーさんのドイツ館の説明に熱心に耳を傾けました。他には鳴門渦の観潮船、阿波木偶人形会館等を観光。夜は鳴門市副市長や鳴門日独協会との交流会をおこないました。フルートのミニコンサートや阿波踊りも催されました。これを機会にさらに鳴門とドイツトリアー市との交流が盛んになる事を約束し、新潟県長岡市に行程をすすめられました。

〒779-0225 徳島県鳴門市大麻町松字東山田 55-2

Tel : 088-689-0099 Fax : 088-689-0909

E-mail : info@doitsukan.com

長崎原爆資料館：長崎市

企画展「東松照明写真展 長崎<11:02>」が地下2階の企画展示室で2008年7月25日～9月30日の会期により開催されました。1996年3月に東松さんから長崎市に寄贈された、作品写真パネル65点が展示されました。

2008年度「原爆資料館収蔵資料展」が2008年11月5日～2009年1月15日の会期により開催されています。原爆資料館では、普段展示しているものの他、多数の被災資料を収集保存しています。この収蔵資料を年次的に公開していますが、2008年度も約30点を展示します。今回は、原爆資料館の前身である国

際文化会館で展示していたものも含まれています。

Tel:095-844-1231 Fax:095-846-5170

<http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/na-bomb/museum/>

ナガサキピースミュージアム：長崎市

企画展示「東京大学所蔵被爆資料展“狛犬は浦上天主堂の獅子頭だった！”」が2008年7月15日～8月3日の会期により開催されました。被爆直後の長崎を訪れた文部省学術研究会議被爆調査団の中に地質学の渡辺武男東京帝国大学教授がいました。彼は被爆試料として“石”150点を収集し持ち帰りました。60年後、その「物言わぬ石たち」は1個の“狛犬”からバイオ鉱物学の田賀井篤平東京大学教授の手によって「被爆の惨劇を語る」こととなります。広島と思われていた“狛犬”が実は長崎・浦上天主堂の“獅子頭”であった…。現物を展示し、その謎をパネルで紹介しました。

終戦被爆63周年企画展「“長崎の証言の会”－被爆体験を記録して40年！」が2008年8月5日～24日の会期により開催されました。1968年に始まった「被爆証言運動」は2008年に40周年を迎えました。運動を推進した「長崎の証言の会」がこれまで出版した被爆体験の記録集『証言』などは70冊を超え、執筆・証言した被爆者はのべ1000人以上にのぼります。『証言』には、悲惨な被爆の実相と後遺症に苦しむ

被爆者の実情、戦争と原爆への怒りがあふれています。「長崎の証言の会」の40年に及ぶ活動の歩みを通して、核廃絶と平和の大切さを考えるものでした。

Tel:095-818-4247 Fax:095-827-7878

<http://www.nagasakiips.com/old/index.html>

薩摩川内市川内歴史資料館：鹿児島

ミニ企画展「終戦記念展示」が2008年8月5日～24日の会期により開催されました。

Tel:0996-20-2344 Fax:0996-20-2848

<http://rekishi.sendai-net.jp/index2.htm>

沖縄県平和祈念資料館：糸満市

第9回特別企画展「カンポークエヌクサー 沖縄 戦後の混乱から復興へ」が、1階企画展示室で10月10日～12月21日の会期により開催されました。「カンポークエヌクサー（艦砲射撃の喰い残し）」とは、沖縄戦で「鉄の暴風」と比喻された米軍の艦砲射撃をくぐり抜けて生き残った者という意味です。廃墟の中から復興に立ち上がった沖縄県民の力強さとしたたかさ、そしておおらかさの中にある息吹とエネルギーを感じ、平和について考える展示を開催しています。

企画展 2008年度「新収蔵品展」が、1階企画展示室で2008年6月

20日～7月31日の会期により開催されました。

「児童・平和のメッセージ展」が沖縄県平和祈念資料館で2008年6月23日～7月10日の会期により、分館である八重山平和祈念館で2008年7月16日～23日の会期により、それぞれ開催されました。

八重山平和祈念館では企画展「戦争と子どもたち」が2008年6月1日～7月4日の会期により開催されました。平和の尊さを考える趣旨で、戦前・戦中・戦後の教科書、戦時中の雑誌、八重山高等女学校生徒の日記などを展示しました。

2008年度第1回子ども・プロセス企画展「子どもたちと沖縄戦ー絵本『オジイの海』」が2008年6月1日～30日の会期により開催されました。沖縄戦では多くの子どもたちが亡くなりました。戦前・戦中・戦後の子どもたちについて、館蔵の沖縄戦関係の写真や実物資料とともに、絵本『オジイの海』をパネル化して展示しました。子どもの目線にあった展示で、戦争と平和を考える機会となりました。

2008年度第2回子ども・プロセス企画展「貧しさの中の子どもたち」が10月27日～11月16日の会期により開催されました。世界の貧しい子どもたちの様子を感じ、体験することで、グローバルな視野を芽生えさせ、平和で豊かな国に住む自分たちに何ができるかを考える姿勢を育むことをねらいとしたものでした。

Tel:098-997-3844 Fax:098-997-3947

<http://www.peacemuseum.pref.okinawa.jp>

対馬丸記念館：沖縄・那覇市

第10回特別展「対馬丸と疎開ーやーさん・ひーさん・しからーさん展」が1階の企画展示室で2008年7月20日～9月15日の会期により開催されました。

Tel:098-941-3515 Fax:098-863-3683

<http://www.tsushimamaru.or.jp/>

那覇市歴史博物館：沖縄

企画展「那覇大綱挽と10・10空襲」展が2008年10月3日～29日の会期により開催されました。資料や写真パネルをとおして那覇大綱挽の歴史や旗頭について紹介しました。

Tel:098-869-5266 Fax:098-869-5267

<http://www.rekishichinaha.city.naha.okinawa.jp/>

海外のニュースなど

ブラッドフォード平和博物館：イギリス

胸を打つ展示、貸し出します

平和博物館（イギリス・ブラッドフォード）では、現在、移動展示シリーズの第5弾・最新版として「女性のピースメーカーたち」を貸し出ししています。平和構築に貢献して

きた過去、現在の女性たちとその業績に焦点を当て、問題を提起します。展示品は、すぐに展示できるA2サイズのパネル28枚（日本語のA3パネルも11枚あります）で、説明やカラフルな写真などです。小中学生向けの教材もあります。

貸し出し費用は無料ですが、郵送料と保険料はご負担いただきます。

日本への往復郵送料は251英国ポンド（2008年11月現在）で、世界中どこへでも郵送できます。

お問い合わせ、申し込みは、Eメールかお電話でお願いします。

e-

mail:peacemuseum@bradford.gov.uk

Tel: +44(0)1274 434009

イスラム社会における平和構築：

平和博物館のもつ可能性

サイード・シカンダー・メーディ

はじめに

1993年にサミュエル・ハンティントンの文明の衝突論が雑誌「フォーリンアフェアーズ」に掲載されて以来、とりわけ9・11以降、2つのイスラム社会についての観点が国際政治の論壇を席卷してきました。一方は強力な西側メディア、学界、軍事的政治的支持者らによって、またもう一方はイスラム社会の権力者達によって展開されてきました。双方は互いに非難しあい、衝突は必至であると喧伝し、テロとの戦いや信条、文化、主権保持の名の下に血なまぐさい対立を正当化してきました。

相対する観点

どちらの側も相手を非人間的にあつかい、対立に拍車をかけています。一方はイスラム社会を野蛮な欠陥社会とみなし、世界中に広がる暴力の原因はイスラムにあるといい、アメリカを擁護します。これに対しもう一方は、ヨーロッパの植民地主義がイスラムを略奪し、紛争の原因を作り、和平を阻み、イスラム教徒をテロリストと決めつけている、など、数え切れない苦境を強調して西側の過ちを非難します。

双方は、それぞれの立場を支持する多くの人びとに影響を及ぼしており、テロとの戦い、イスラム擁護の名のもとに世界を鋭く対立させ、アフガニスタン、イラク、パキスタンでの殺戮を正当化します。軍事を強化し、イスラム社会の民主化、協力、平和を阻み、文化の壊滅もしくはタリバンによる支配以外イスラム世界には平和の道がないかのような印象を与えています。

癒されるべき傷

イスラム社会の受けてきた傷は癒されなければなりません。同時に、大多数の国や国民はアメリカとその連合軍によるアフガニスタン、イラク攻撃を容認しておらず、西側の何百万という市民が反戦の意思表示をしたという事実が、イスラム社会の人びとに伝えられねばなりません。また、西側はイスラム教の平和的原理、価値、歴史などに目を向ける必要がありますし、イスラム社会自身も権威主義的な統治、不平等、軍事主義、実質的な法や市民社会の不在などによってもたらされている政治的、構造的暴力が、自分たちの社会

に存在する事実を認識する必要があります。このような気づきが、癒しを促すでしょう。

平和博物館の政治的役割

こうした状況の中で、イスラム社会における平和博物館の果たす役割はきわめて重要になってきています。平和博物館は、異なる文化、政治体制、宗教などの掛け橋となり、それぞれのやり方で平和を求め、共存共栄するための運動を強化する可能性を持っています。最終的には、何世紀にもわたる傷を癒し、異文化間の理解と協調を築く平和文化の推進者となり、イスラム社会およびそれ以外の社会における平和や正義、暴力の根源について市民を教育する場となりえます。

また、このような平和博物館は、イスラム社会が正義、平等、誠実、平和と非暴力、対等な権利を求めていること、「学者のインクは殉教者の血よりも神聖である」「剣で敵と戦う事は劣った聖戦であり、自己の中の悪しき欲望と闘う事はより偉大な聖戦です」といった声明の深い意味を明示することができ、イスラムの英雄達が弾圧者や政治システム、頑迷な信仰に対し非暴力で立ち向かった歴史や教えを展示することもできます。また、偉大なスーフィーたちが愛や人間性を歌い上げ、信徒達に他の宗教やその信者を敬い不正義や抑圧に立ち向かうことを説き平和に貢献したことも取り上げることができます。平和教育の拠点として来館者に、われわれは全て異教、異文化が織り成すひとつの世界の一部であること、他者排除から脱して国際

社会の中で互いに補完しあって共存共栄することの緊急性、重要性を説く場になりえます。それは虹の掛け橋のようなものとなります。

紛争解決後のイスラム社会における平和博物館

非イスラム圏で元植民地であった社会と同様に、元植民地のイスラム社会は紛争、暴力で荒廃し、復興には数十年かかるであろう。しかし、時代は変わり、一般市民が連帯し権力に挑む力は増大しています。アメリカの侵略に対する国際的非難や侵略失敗は、軍事力で人びとの魂まで征服することはできないことを明らかにしました。弱者の力を侮ることはできません。しかし、アメリカが撤退した後、その功績が軍事的要素にあったとされるならば、アメリカ撤退後のイラク、アフガニスタンは、新たな好戦的愛国主義に陥る危険性を持っています。戦争の記念碑やその物語が憎しみや復讐心を煽ることもなります。

アフガニスタン、イラクでのアメリカの残虐行為や人びとの受けた苦しみはイスラム社会のメディアによって強調されてきました。確かにそれは事実ですが、それだけでは十分とはいえません。もっと大きな全体像が人びとに伝えられなければなりません。大多数のイスラム国家がアメリカのアフガニスタン侵攻を擁護してきた事実や、反戦運動がイスラム国の中でよりもむしろ非イスラム国、とりわけヨーロッパや北米で盛んにおこなわれてきた事実も報道されるべきです。そのような歴史の語り手として最もふさわしいのは戦争

博物館ではなく、平和博物館です。選別された一部分ではなく、歴史の真相全てが語られるとき初めて傷は癒されます。持続可能な平和、発展のために、紛争後のイスラム社会は、紛争の根本原因とさまざまな内外の関係者の役割をきびしく点検し、できる限り客観的で事実に基づいた歴史のストーリーを提示することを求められています。それゆえにイスラム社会には平和博物館が必要です。

平和博物館の可能な場所

平和は人間にとって基本的な要求であり権利です。非イスラム圏のアジア、アフリカ、ラテンアメリカの一般市民のように、イスラム社会でも人間の地位が高められ、平和と人間の安全が保障されることが求められます。ゆえにどの国においても平和博物館の設立が急務です。さらに問題ごとの平和博物館、たとえば、平和と市民権、平和と民族の調和、平和と人権、平和と女性の権利、平和と人間の安全保障、平和と人間の尊厳、などを扱ったものがが必要です。このような平和博物館はイスラム社会も含めた全ての社会に建てられるべきものです。紛争で引き裂かれたアフガニスタン、イラク、パキスタン、スーダン、ソマリアや軍部、王室、エリート権力集団に統治された大多数のイスラム国家が必要としているものです。

イスラム社会における平和博物館の建設

イスラム社会の質的・政治的・社会的変革をめざした平和博物館の建設は市民社会の成長と、国内の民主的な勢力や伝統と連帯にかかっています。

これは大変に時間のかかる仕事ですが、イスラム社会は平和博物館の運動に追いつこうとする熱意をもって、ここで2つの主要なイスラム国家、パキスタンとイランで平和博物館がすでに設立されている事を付記したい。

「平和・人権子ども博物館」パキスタン・カラチ 2001年

「超宗派平和博物館」パキスタン・イスラマバード 2008年

「テヘラン平和博物館」イラン・テヘラン 2007年

いずれはエジプト、モロッコ、トルコ、アラブ首長国連邦、紛争後のアフガニスタン、イラクを含めた多くのイスラム国家に平和博物館が建設されることが望まれます。

サイード・シカンダー・メーディ
立命館大学国際関係学部客員研究員
および国際交流基金研究員(2008年12月31日迄)

市庁舎広場のレヒ・ワレサ展示会

11月20日～30日ノールウェイのポーランド・クラブとヨーロッパ連帯センターは「レヒ・ワレサー—その人、その歴史、その象徴」という展示会をノーベル平和センター前で開催します。

レヒ・ワレサは1970年代からの彼の仕事と行動主義を通してポーランドと国際組織の自由のシンボルとなりました。1983年、彼はその業績に対してノーベル平和賞を授与されました。

ワレサはその時、ポーランドへの

再入国を拒否されるかもしれないという不安を除外してもポーランドを出ることを望みませんでした。そこで、彼の妻、ダヌタ・ワレサがオスローへ行き、代わりに賞を受け取りました。

1990年、レヒ・ワレサはポーランドの大統領に選出され、その地位は1995年まで続きました。ワレサはこの展示会のオープニングに出席する予定です。

泰緬(タイソ)鉄道センター：2003年カンチャナブリに創設

タイービルマ鉄道センター(TBRC)は対話方式の博物館であり、泰緬鉄道の歴史を展示する情報と研究の施設です。

タイのノンプラードウックからビルマのタンビュザヤまでの415キロを走るこの鉄道は連合国の戦争捕虜(PoWs)と強制徴用されたアジア人労働者を使って第二次大戦中に日本陸軍によって建設されました。センターは完全なエアコンディショニングがあり、ビジターに教育的感動的経験を提供しています。

この施設は個人所有でオペレート・センターは公平でバランスがとれ、特定の主義に偏らない方法によって泰緬鉄道の物語とカンチャナブリの2つの軍共同墓地の重要性を説明するために建設されました。ジャングルキャンプから生還した人びと、または帰還したPoWsの家族から寄贈された多くの工芸品や個人的な多くの品々が展示されています。

創設者ロブ・ベアティは長年、調

査研究を続け、プロジェクトの全行程を地図にすることを可能にしました。彼はほとんどのキャンプ、元の共同墓地、埋葬地の位置、及びその完了後の1年半以上と第二次大戦終結前まで、鉄道を機能させていた駅の位置を確認しました。

博物館には鉄道のモデル、典型的な捕虜のキャンプ、PoWsの病院が展示され、多くの興味深いギャラリー全体にタイ語と英語で鉄道の全歴史が2つのレベルで説明されています。

特別に興味ある人びとや学生のグループには前もって整理された非公式のツアーが提供され、一方、多くの一般の人びとは博物館全体にうまく設定された情報を見つけ、その目的と経過を簡単に自分のペースでおこなうことができます。訪問者それぞれのレベルによって1時間から数時間必要ですが、戦争の間、鉄道プロジェクトで働き、あるいは亡くなった人びとの親戚たちは何度も展示を見たいと思うでしょう。

広範囲の研究が今もなお続けられ、不幸にも亡くなった人びとばかりでなく、この驚くべき歴史の一端において働いたすべての人びとの資料も集め続けられています。415キロをわずか15か月で完成させるのに貢献した強制労働者の子孫はそのプロジェクトの事実がほとんど理解できず、多くの疑問を残したままです。

泰緬鉄道センターはどこかほかのところで得られるより多くを学ぶことができ、PoWsの親戚の個人的な細かな情報を見つけられる最良の機会を与えられるでしょう。

多くのことが複合されたこの研究センターは予約制で、戦争時の多くの感動的な文書、記録、個人的な報告書や本などを所蔵しています。

その背景や鉄道について知りたい人びとには、多分そこで働き、あるいは、亡くなったであろう人びとの実際のキャンプへの聖地巡りも用意されています。日本人と朝鮮人の見張りの下で堤防の建設、鉄道の688橋の幾つか、「ハンマーとたたき」と呼ばれた捕虜の群れの手でほとんど切り開いた山の場所を近くで見ることができます。

泰緬鉄道センターの目的は、研究者仲間だけでなく、カンチャナブリの多くの旅行者に対しても世界的な基準の便宜を与え、国際的に最高の基準を企画・維持し、この事件と、この建設の期間及びその後においても耐えたすべての人びとの記憶が永遠に保持されるようにすることです。泰緬鉄道センター（T. B. R. C 株式会社）：

73 Jaokannun Road, BanNua, Amphoe Muang, Kanchanaburi 71000 Thailand.

管理者 Rod Manttan

Tel: +66 34 512721 Fax: +66 34 510067

web site:

<http://www.tbrconline.com>

email: abmin@tbrconline.com

アパルトヘイト博物館：南アフリカ

この博物館は2001年に開館し、アパルトヘイトの歴史について展示

をしています。1948 年以來白人の政府はアパルトヘイト政策の下で 2000 万人の黒人を奴隷状態にしました。1994 年に監獄に入れられていたネルソン・マンデラ氏が大統領に選出されましたが、それは人びとの抵抗、勇気、不屈の精神の物語のクライマックスでした。博物館では映画、写真、パネル、展示物を使って、人種差別に基づく国家が是認した体制と、その圧制を打倒しようとする大多数の人びとの戦いを示しています。特に 22 人の個人に焦点を当てた展示は、感動的です。

所在地：Apartheid Museum:
Northern Parkway & Gold Reef Road,
Ormonde, Johannesburg, South
Africa Postal: PO Box 82283
Southdale 2135 Johannesburg,
South Africa
Tel: +27 11 309 4700
<http://www.apartheidmuseum.org/>

境界線にある博物館：イスラエル

この博物館はエルサレムにあり、社会政治的現代美術館です。そこでは独自のやり方で、論争になるような社会的問題を人びとが討論するように、境界線のない言語として芸術を使っています。展示の中心は、国家、民族、そして経済における境界線ですが、対立している者同士の対話を促進するように努力しています。2005 年 5 月から 2008 年 6 月まで人権をテーマにした展示をしてきました。暴力が引き起こす脅威、グローバル化された世界で苦しむ労働者、暴力が支配する異常な状況などです。博物館はアラブ系キリスト教徒の建築家であるアントン・バラムキ氏

(Anton Baramki) によって 1932 年に建設された建物にあります。エル

サレムが分断された間(1948-1967)、その建物はイスラエルとヨルダンの間の境界にある前哨部隊地として使用され、分断された両者が出会う唯一の場所となりました。

この博物館は 1999 年、ドイツのホルツブリンク家が援助し、博物館の学芸員であるラフ・エトガー氏の指導の下に創設されました。

Museum on the Seam, 4 Chel
Handasa st., P.O.B. 1649,
Jerusalem 91016 ISRAEL
Tel. +972-2-6281278
Fax. +972-2-6277061

<http://www.coexistence.art.museum/Coex/Index.asp>

ピースラブ博物館：2008 年にコルレーニョで創設：イタリア

2008 年 9 月 21 日コルレーニョ市の新しいピースラブ博物館のホールが開館しました。そこでは文化面で平和を促進し、人びとが紛争解決できるように手助けをすることを目的にしています。そのために情報入手、積極的な非暴力主義活動、協力をしておこなう建設的な活動、非暴力的仲裁、戦争や人権蹂躪に対する抵抗をおこなう力や技能の開発をすることを含んでいます。

その博物館はすでにある市立抵抗博物館が入っているのと同じ建物の中にあります。両方の博物館は、ナチスファシズムに抵抗した戦いにおける非暴力的主導権について将来展示をする予定です。ピースラブとして、三つの訓練協会が運営する非暴力的技能の訓練を提供しています。そして博物館として、初めて視聴覚

メディアを使っています。その資料は、最近の歴史における非暴力的仲裁のいくつかの例を示して、戦争への抵抗や人権の蹂躪について展示をしています。例えば、デンマーク（1940-43）、イスラエルとパレスチナ（2000-07）、ボスニア（1992-98）、インドのガンジー（1930-47）、アメリカのマルティン・ルーサー・キング（1955-1968）、グアテマラ（1970-76）、カラブリア・シチリアのマフィア（1975-2007）、中国の天安門（1989）、ドイツのベルリンの壁（1989）について、テレビ番組保管所の資料を使っています。（Lucetta Sanguinetti さんによる。）

Peacelab-Museum of Collegno:
Piazza Cavalieri della SS.
Annunziata 10093 Collegno -
TURIN - Italy

Tel. +39(0)11.4145876 (Peace
Office Rocco Padovano)

Cell. +39 347 164 51 44

(Peacelab Museum Project)

http://www.comune.collegno.to.it/aree-tematiche/collegnopace/index_eng.html

lucettasanguinetti@tiscali.it

and

rocco.padovano@comune.collegno.to.it

中国「慰安婦」問題研究センター

中国、韓国と日本などの学者の調査と研究によって、第二次世界大戦の時に「従軍慰安婦」の人数は 40

万人以上いて、主に中国、朝鮮、韓国、日本、東南アジアと欧米などの地区から来たことがわかりました。中国籍の「従軍慰安婦」の人数は 20 万ぐらいであり、大多数は誘拐されたり欺かれたりして、慰安所に連れて行かれてしまいました。年齢の範囲は、10 代から 40 代までである。彼女たちは祖国で旧日本軍にさんざん人権を蹂躪され重大な被害を受け、想像できないような苦痛を体験したのです。その苦痛は彼女たちの一生続いてしまいました。

中国大陸で初めて「慰安婦」の問題の調査と研究をしたのは、1990 年代の初めであり、主に各地の知識人の志願者がおこないました。1999 年、上海師範大学中国慰安婦問題研究センターが正式に創立され、全国の「慰安婦」問題の調査を推進し、そしてぞくぞくと総括的な調査と研究の成果を発表していきました。センターは 2000 年から今年まで性奴隷にされた女性を見つけ調査した後で、全国の生存者への生活援助の活動につとめています。

今日、センターの調査によって中国大陸では生存中自分の体験を公にした元「慰安婦」の生存者が、47 人いることがわかりました。彼女たちの大部分が貧困と病気に苦しむ生活を送っています。幸い外部からの差別と冷遇の状況は、変わってきています。

2000 年から、センターの推進活動とメディアなどの援助のおかげで、国内外のさまざまな団体とさまざまな人が積極的に元「慰安婦」の生存者に寄付していますし、被害事実の

証拠を保存する活動もつぎづきに成されています。更に多くの志願者と団体がこの活動に参加し続けていますし、法律学界も彼女たちが日本政府に提訴する活動に力強い援助の手を差し伸べています。

中国「慰安婦」資料館

展示場所：上海市桂林路 100 号上海師範大学東部

文苑楼 B1 展覧室

開館時間：火曜日、木曜日、土曜日
午前 9 時から午後 4 時まで

で

閉館期間に団体の見学があれば予約して下さい。

yaofei813@citiz.net

「核兵器のジレンマ」の展示

2008 年 9 月 19 日から 2009 年 1 月 25 日までスペインのゲルニカ平和博物館で「核兵器のジレンマ」という展示をしています。核兵器について議論し、より安全な未来について研究する上で参考になる展示です。詳細は下記のウェブサイトにあります。

www.nucleardilemma.org

エラスムスに関する展示：オランダ

2008 年 11 月 8 日から 2009 年 2 月 8 日までオランダのロッテルダムにある Museum Boijmans Van Beuningen という博物館で、エラスムス (Desiderius Erasmus Roterodamus 1466-1536) に関する展示がおこなわれています。エラ

スムスが『愚神礼賛』(1509) を執筆して 500 年後、エラスムスに関する展示をおこない、彼の考えや芸術と社会に与えた影響について取り上げています。彼の肖像画、手紙、著書などを展示し、学問、教育、戦争と平和、教会と芸術について焦点を当てています。

Museum Boijmans Van Beuningen
Museumpark 18-20, NL-3015 CX
Rotterdam
The Netherlands

『戦争に反対する声』英国：リン・スミス (Lyn Smith)

現在『戦争に反対する声』

(VOICES AGAINST WAR: 仮題) という本を執筆しています。2003 年 2 月 15 日に英国では約 200 万人の人びとがロンドンでイラク戦争に反対する意思表示をしました。そしてそれは国際的にも広がっています。このような反戦運動は、以前から存在していました。ロンドンにある帝国戦争博物館では、反戦者の記録を保存していますが、その中の 200 人の証言を通して第一次世界大戦から今日まで戦争に反対した人びとの声を紹介しています。イギリスでは第一次世界大戦の時徴兵制が導入されましたが、1 万 6000 人の徴兵忌避者が出て、「臆病者」などと言われました。しかし 1919 年までには、戦争の際良心に従って行動する権利があることが受け入れられるようになりました。第二次世界大戦では 6 万 2000 人の徴兵忌避者が出ました。第二次世界大戦で原爆が使用され、

反戦運動が劇的に変化し、1950年代以降核軍縮運動（CND）のような反核団体ができました。その後フォークランド戦争、湾岸戦争、イラク戦争、アフガニスタン戦争での反戦者の運動は、いろいろと変化しています。

証言者としてイギリスの兵士、一般市民、反戦主義者だけでなく、日本、アメリカなど他国の人びとの声も含める予定です。平和主義は弱さと関連付けられる傾向がありますが、そうではなく人間の忍耐、犠牲、勇敢さの物語は貴重です。

（なお広島と長崎の被爆者の声も含まれることになり、執筆の協力をしました。山根和代）

第2回包括的博物館国際会議

オーストラリアクインズランド大学で2009年7月8～11日に第2回包括的博物館国際会議が開催されます。詳細は下記のウェブサイトで見ることができます。

会議では「博物館はどのようにしてもっと包括的になることができるか」という問題について話し合います。博物館関係者、研究者、教育者などの参加を求めています。

* 詳細は下記のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.Museum-Conference.com/>.

訃報記事など

立命館大学国際平和ミュージアム 元館長・加藤周一さん逝去

安齋育郎

立命館大学国際平和ミュージアム初代館長の加藤周一さんが、2008年12月5日に亡くなりました。加藤さんは1992年5月から1995年3月まで初代館長を務めました。立命館大学国際関係学部の客員教授を12年間務められた加藤さんは国内外で広く知られた卓抜な批評家で、時に「知の巨人」と呼ばれました。加藤さんは東京大学医学部の出身ですが、文芸評論の分野で天才的な能力を発揮され、『日本文学史序説』で大仏次郎賞を受賞しました。加藤さんは博覧強記の人で、日本語・英語・フランス語・ドイツ語・イタリア語の5か国語で大学の講義が担当できました。何百冊もの知性豊かな本を出版していますが、そのテーマは文学・美術・音楽・宗教・科学・社会・経済・政治などの多岐に及びました。2000年にフランス政府からレジオン・ドヌール賞を受賞しています。ノーベル文学賞受賞者の大江健三郎さんらとともに9条の会を立ち上げましたが、それは全国7000余の地域レベルの9条の会となって結実しました。学徒出陣から50年目の1993年、国際平和ミュージアム主催が開催した講演会で、加藤さんは「過去に現在を見、現在に過去を見る」ことを強調されました。加藤さんの訃報に接し、高杉巴彦館長および安齋育郎名誉館長は弔意を表す声明を発表し、平和のための活動の一層の発展の決意を表明しまし

た。

大阪国際平和センターの岡本理事 長ご逝去

安齋育郎

1989年の創立時から大阪国際平和センターの理事長を務められた岡本知明さんが2008年11月25日に亡くなりました。同センターは1991年に「ピースおおさか」を開設、1998年には立命館大学国際平和ミュージアムとともに第3回国際平和博物館会議を共催しました。岡本さんは平和関連の博物館のネットワークを世界規模で強めることが重要であることを深く理解し、この国際会議を支援し、大きな成果を挙げました。訃報に対して、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン平和のための博物館国際ネットワーク統括コーディネータ、サマルカンド国際平和連帯博物館長のアナトーリ・イオネソフ、ケニヤ平和博物館・創設者のスルタン・ソムジェー、テヘラン平和博物館プロジェクト国際担当のシャーリア・カーテリ、ニューヨーク大学のジョイス・アプセル、ブラッドフォード平和博物館副館長のクライヴ・バレット、元カラチ大学教授のサイド・シカンダー・メーディ、デイトン国際平和博物館長のスティーヴ・フライバーグ、立命館大学国際平和ミュージアムの安齋育郎名誉館長および高杉巴彦館長、高知平和資料館「草の家」の山根和代理事など、世界中の平和博物館関係者から弔文が寄せられました。

ピーター・ヴァン・デン・デュン ゲン（INMP 統括コーディネータ） の弔文

ピースおおさか御中

岡本知明さんのご逝去の報に接し、悲しく思います。私はご遺族およびピースおおさかのスタッフの皆さんに心よりの弔意を表します。1991年の創設以来、ピースおおさかは革新的で勇気ある展示およびとりわけ若い世代の平和教育のための教育的プログラムにより、世界的な評価を得ました。

1994年、私はピースおおさかを訪れる幸運に恵まれ、大いに印象づけられました。

その4年後の1998年、ピースおおさかは記憶に残る第3回国際平和博物館会議を主催しましたが、私は岡本さんの心からの支援に深く感謝しています。

ピースおおさかのスタッフは、岡本さんが深く関与された重要かつ貴い活動を継続することによって、岡本さんの記憶に一層の輝きを与えることと確信します。

ピースおおさかがその創設以来取り組んでこられた精力的な活動に深く感謝するとともに、貴館がますます地歩を固め、発展されることを望みます。

サイド・シカンダー・メーディさんのこと

安齋育郎



国際交流基金の研究者として来日し、立命館大学国際平和ミュージアムの私のもとで10か月間にわたり平和博物館の調査・研究に従事していた元カラチ大学教授のサイード・シカンダー・メーディさんは、数多くの日本の平和博物館を訪れて沢山のことを学び、原爆被害についての映像資料を収集するなどして2008年12月31日に帰国の途につきました。滞在中、高知大学、立命館大学などで「インド・パキスタン国境への平和博物館建設構想」や「ムスリム社会における平和構築」の問題について講義をおこない、第6回国際平和博物館会議でも「パキスタンにおける女性の人権に関する博物館建設構想」などを提起しました。この女性人権博物館は、パキスタンでレイプを受けた女性を切り口とする博物館で、シカンダーさんは日本の関連博物館の賛同・協力も得て具体化したいと考えています。第6回国際平和博物館会議の開催にあたっては『平和のための博物館：過去・現在・未来』（英文）の共同編著者としても活躍し、総会では「平和のための博物館国際ネットワーク」の諮問委員にも選出されました。帰国直後にスペイン、オーストリアでの教育活動に出向くなど多忙ですが、来年

には「平和創造に貢献したアジア人」や「核兵器の被害と反核・平和運動」に関する本の執筆に従事し、日本から被爆者や科学者をパキスタンに招く計画を進めるなど、意欲的な活動計画をもっています。

研究指導上の助言者を務めた私としても、滞在中に便宜を図って頂いた多くの平和博物館関係者に深く感謝します。

出版物

木村早苗「広島の声なき語りべたち」文芸社

岡村幸宣「丸木位里・丸木俊と20世紀 第1部 1901-1950」原爆の図丸木美術館発行 2000円
2008年発行

岡村幸宣「丸木俊 絵本の世界—鮮やかな色彩の交響曲—」原爆の図丸木美術館発行 600円 2008年発行

岡村幸宣「丸木俊の絵画—女子美術時代から『原爆の図』まで」原爆の図丸木美術館発行 600円
2007年発行

ジョン・W・ダワー著、袖井林二郎訳「戦争と平和と美—丸木位里と丸木俊の芸術—」原爆の図丸木美術館発行 600円 2007年発行

War, Peace and Beauty: *The Art of Iri and Toshi Maruki* by

John W Dower, published by
Maruki Gallery for the
Hiroshima Panels in 2007,
600yen

Young Voices: British Children Remember the Second World War by Lyn Smith. Penguin Books. 2007. 子どもの視点で第二次世界大戦を描いています。日本が東インド（今のインドネシアですが、戦争中はオランダが支配していました）を支配した際、収容所にオランダ人だけでなく、イギリス人の子どもも入れられていました。日本軍はオランダの若い女性を性奴隷にしようとしたのですが、オランダの女性たちは若い娘たちを隠し、体格の良いオランダの女性が連れて行かれました。しかし日本人の兵士は、その女性たちに殴られて何もできずに連れて帰ったといいます。日本の兵士はあまりの恥ずかしさに、仕返しはしなかったというエピソードなどがあります。（英文です）

平和・環境教育に関するウェブ サイト

Transitions:

www.globalepe.org (英文) は、Earth and Peace Education Associates International (EPE) が発行しています。最新号では教育のための非政府組織に関する情報が紹介されています。

おことわり

無署名の記事は、編集者の責任でまとめたものですが、署名記事は執筆者の責任で書かれたもので、必ずしも「平和のための博物館・市民ネットワーク」の事務局や編集者の見解を示すものではありません。

